

福岡市埋蔵文化財年報 VOL.30

—平成27(2015)年度版—



2016

福岡市教育委員会

序

福岡市では、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存と活用を図ることを目的として、公共及び民間の各種開発事業の事前審査、記録保存のための緊急調査、また重要遺跡確認調査等を実施しております。

文化財部は平成24年度より教育委員会から市長部局の経済観光文化局へと移り、教育委員会の補助執行として、文化財活用を含め多岐にわたる文化財保護業務に取り組んでおります。

本書は、平成27年度における埋蔵文化財保護行政の概要を報告するものです。開発事業に起因する緊急調査件数は、平成17年以降減少をつづけてきましたが、25年度より増加しています。発掘調査一件あたりの規模は、民間、公共とも、小規模開発となる傾向がみられています。今後とも埋蔵文化財保護業務については適正で迅速な対応を進めてまいりたいと思います。

本書が文化財保護に対するご理解の一助となり、また学術資料としてもご活用いただければ幸いです。

平成28年12月26日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例言

- ・本書は、埋蔵文化財審査課、埋蔵文化財調査課、文化財保護課、大規模史跡整備推進課が平成27年度に実施した各種開発事業に伴う事前審査と発掘調査の概要及び本報告、ならびに新指定文化財の概要について収録したものである。
- ・本書に記載ある27年度調査のうち、調査番号1511、1514、1518、1521、1523、1527、1535、1536、1542、1549、1550は、この年報をもって本報告とする。その他、本年度別途、本報告書が刊行されている調査については調査概要を摘要している。
- ・Vの各調査の概要及び調査報告は各調査担当者が分担執筆した。VIについては文化財保護課（水野梓穂）が執筆した。
- ・上記以外の執筆並びに本書の編集は佐藤一音が担当した。

表紙写真：元寇防塁第11次調査風景と願寺寺道跡第1次調査全景

目次

I	平成27年度文化財部の組織と分掌事務	2
II	開発事前審査	3
III	発掘調査	5
IV	公開活動	5
V	平成27年度発掘調査概要および報告	6
VI	平成27年度新指定文化財	58
	報告書抄録	64

I 平成27年度文化財部の組織と分掌事務

文化財部 文化財部の組織と分掌事務

51

文化財保護課 10

- ― 運用係 (事3、文1) 部の総括、文化財施設の管理
- ― 整備活用係 (事1、文2) 史跡の保存・整備・活用、文化財関係団体との連絡調整
- ― 文化財調査普及係 (文1、学1) 文化財保護審議会、文化財の調査、普及事業

大規模史跡整備推進課 5

- ― 福岡城跡整備係 (事1、文2) 福岡城跡の調査・整備、課の庶務
- ― 鴻巣館跡整備係 (文1) 鴻巣館跡の調査・整備

埋蔵文化財審査課 11

- ― 事前審査係 (文4) 公共及び民間開発事業に係る埋蔵文化財の事前審査
- ― 主任文化財主事 (文1)
- ― 係員 (文1)
- ― 管理係 (事3) 埋蔵文化財審査課・埋蔵文化財調査課の予算・決算、経理、課の庶務

埋蔵文化財調査課 22

- ― 調査第1係 (文5) 課の庶務・主に東部地区の埋蔵文化財の発掘調査及び保存
- ― 主任文化財主事 (文4)
- ― 調査第2係 (文5) 国庫補助事業総括・主に西部地区に係る埋蔵文化財の発掘調査及び保存
- ― 主任文化財主事 (文3)

埋蔵文化財センター 7

- ― 運営係 (文2事2) 施設の管理運営、埋蔵文化財の収蔵・保管・展示等、教育普及
- ― 保存分析係 (文2) 埋蔵文化財の保存・分析
- 事：事務職 文：文化財専門職 学：文化芸職

埋蔵文化財審査課、調査課の職員構成 (審査課管理係係員2は事務職。他は文化財専門職)

◇埋蔵文化財審査課長 米倉寿紀	◇埋蔵文化財調査課長 常松幹雄
管理係長 大塚紀彦	調査第1係長 吉武学
係員 横田忍 川村啓子 松尾奈緒子	係員 清金良太 吉田大輔 細石朋希
事前審査係長 佐藤一郎	係員 松崎友理 山本晃平
係員 板倉有大 福岡美由紀	係員 小林義彦 (再任用)
大森真衣子	埋蔵文化財調査員 中園将洋 (嘱託員)
主任文化財主事 池田祐司	主任文化財主事 加藤良彦 屋山洋 上嵐子
	調査第2係長 榎本義嗣
	係員 久住猛雄 中尾祐太 服部瑞輝
	朝岡俊也
	山崎龍雄 杉山富雄 (再任用)
	主任文化財主事 荒牧宏行 加藤隆也 星野恵美
	総務課付 (陸前高田市派遣) 瀧本志志 (主任文化財主事)

II 開発事前審査

1. 概要

本市では、土木工事等の各種開発事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、開発事業計画地における埋蔵文化財の有無を確認した上で、保存に係わる協議等を行っている。

公共事業については、関係機関・部局に次年度の事業計画の照会を行い、埋蔵文化財の保存上問題になると判断される事業についてはその取り扱いについて協議を行っている。

民間の開発事業については、都市計画法に基づく1,000㎡以上の開発事業、建築基準法に基づく建築事業等を対象として事前協議を求めている。また建築等の計画策定段階での照会にも窓口やファックスで応じ、埋蔵文化財の保存上の措置について必要な指示を行っている。平成24年8月よりは本市ホームページにて、包蔵地外町丁目名リストの公開を開始し、利用者の照会の便宜を図っている。

2. 平成27年度の事前審査

平成27年度の前審査件数は、表1のとおりである。平成19年からの増加傾向を経て、平成22年からは高止まり状態、平成26年度に減少、平成27年度には再び264件(11%)増加に転じている。

申請内容 公共事業に伴う依頼155件(平成25年度より公共汚水樹は個別に申請)の内訳は表3のとおりである。事業者別では、国機関11件(7%)、福岡県0件、福岡市142件(92%)、その他5件(3%)で、福岡県以外前年度とはほぼ同じ比率である。事業別に見ると水道・電気等102件(66%)、道路5件(3%)、住宅を含めた建物8件(5%)、学校関係5件(3%)、公園6件(4%)、空港関係8件(5%)である。公有財産の売却等の土地調査にかかる前審査依頼は10件(6%)であった。なお事業照会件数は1,381件で、前年度より392件40%増である。事業別の内訳は、上下水道759件(55%)、学校82件(6%)、道路は97件(7%)、公園15件(1%)、住宅を含めた建物32件(2%)、空港12件(1%)であった。

民間事業1,147件の届出内容は、事業別では個人住宅401件(35%)、戸建住宅122件(11%)、共同住宅222件(19%)、宅地造成34件(3%)、個人住宅兼工場または店舗1件など住宅関連事業をあわせて780件(68%)でこの3年間は同じ比率である。個人住宅は昨年から22件、7%増である。住宅以外の事業としては、工場3件、その他の建物(事務所、病院、寺社、倉庫等)84件(7%)、その他の開発(青空駐車場、資材置き場等)22件(2%)である。店舗は37件(3%)で、前年・前々年度とほぼ同じである。土地売買に伴う審査依頼は10件(1%)で、前年度より微増している。区画整理計画地の事前の調査依頼は4件である。

公共と民間の申請の合計を別に見ると博多区352件(27%)、早良区277件(21%)、南区234件(18%)と前年度と順位は変わらないが、博多区が占める比率が低くなっている。博多区で30件8%減、城南区22件16%減に対し、中央区3件11%増、早良区18件7%増、西区42件26%増、南区45件24%増、東区13件11%増と、いずれも増加に転じている。

表1 平成16～27年度事前審査案件数推移

事業	内 訳	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
公共	事業照会審査件数	662	668	665	769	862	1,143	1,191	1,181	1,181	1,220	989	1,381
	申請件数	112	113	133	161	202	228	195	191	184	135	290	155
	審査件数計	774	781	798	930	1,064	1,371	1,386	1,372	1,365	1,355	1,279	1,536
民間	窓口照会件数	5,842	6,126	8,309	7,226	6,144	5,555	6,225	6,791	7,195	6,491	12,301	12,356
	FAX照会件数	1,499	2,206	3,354	3,990	3,537	3,729	4,584	5,716	7,710	7,999	8,648	9,317
	照会件数計	7,341	8,422	11,663	11,216	9,681	9,284	10,800	12,507	14,365	14,490	20,949	21,673
	申請(審査)件数	1,207	1,257	1,090	1,011	1,000	924	1,184	1,176	1,261	1,339	1,140	1,147
公・民審査件数計		1,981	2,038	1,888	1,941	2,064	2,295	2,570	2,548	2,626	2,607	2,419	2,683



指図書内容 公共、民間各事業の事前審査の結果、事業者に指導した内容は表3のとおりである。次年度継続、取り下げを除くと審査件数は1,251件で、前年より136件減少している。危険な公共汚水樹の申請を重要遺跡内に限定したことによる。総合的に見ると書類審査での回答964件(79%)、以下踏査10件(1%)、試掘230件(18%)である。審査結果は開発同意127件(10%)、慎重工事929件(74%)、工事立会125件(10%)、発掘調査45件(4%)、要協議(設計未定、売却予定遺跡ありなど)4件である。

試掘調査・確認調査 包蔵地内で行われる確認調査、包蔵地外で行われる試掘調査(以下試掘調査と総称する)は東区26件、博多区101件、中央区7件、南区45件、城南区17件、早良区45件、西区45件、総計286件で、遺跡数は110遺跡である。10件以上試掘した遺跡としては箱崎遺跡13件、比志遺跡群10件、有田遺跡群21件、遺跡隣接地での試掘調査は27件であった。試掘件数は昨年度に比べ10%減であった。東区10%、博多区11%、早良区25%、西区15%減、城南・中央区はほぼ回数、南区のみ15%増であった。

表3 平成27年度事前審査内訳

区名	事業	審査種別(書類審査・現地踏査・試掘調査)でみた判断指示の結果												取 下げ	区別審査件数 計		
		開発同意			慎重工事			工事立会			発掘調査					協 議	審 査 無 続 行
		書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘				
東	公共	16			8	1										25	129
	民間	13	1	3	62	2	10	3		3	1	4			1	1	104
博多	公共	2			30		4	12			1	2			3	1	55
	民間	9		4	160		33	28		14	4	18			5	5	330
中央	公共	3			1		1									1	6
	民間	2			11	1	5			1						1	21
南	公共				1		2	1							1		6
	民間	15		5	145		27	12		5	1	1			4	2	217
城南	公共				3												3
	民間	6	2	1	78		2	10	8		1						108
早良	公共	1			6										2	2	11
	民間	13		1	164		21			4	1	7			2	1	214
西	公共	1			6		2	1				1			11		22
	民間	19	1	9	114	1	18			7	2	2			6	1	179
小計	公共	23			55		10	14		1	11	3			1	3	128
	民間	77	4	23	734	6	124	51	0	35	9	0	32	0	0	1	1,118
合計	公共	73			36		1										37
	民間	100	4	23	789	6	134	89	0	36	20	0	35	2	0	2	26
	協 議																
	審 査 無 続 行																
	計																37

窓口参照会 民間業者等による窓口における埋蔵文化財の有無に係わる照会等は12,356件、ファックスでの照会は9,317件、あわせて21,673件で、前年度より724件の増加である。平成24年8月より本市ホームページにて、包蔵地外町丁名リストの公開を開始し、利用者の照会の便宜と照会件数減を図っているが、窓口件数は一時的に減少したものの、再び増加している。ファックス照会件数は22年度以降毎年1,000件前後増加しているが、27年度は669件増であった。包蔵地内1,837件(20%)、包蔵地隣接地内570件(6%)、包蔵地外6,911件(74%)で、この比率はこの7年間ほとんど変わっていない。区別の内訳は博多区1,736件(17%)、南区1,857件(20%)、中央区1,716件(18%)、東区1,312件(14%)、早良区1,050件(11%)、西区904件(10%)、城南区742件(8%)であった。

3. 埋蔵文化財包蔵地の改訂

本市では、試掘調査や発掘調査などの成果にもとづき、より正確な埋蔵文化財包蔵地範囲の実情に近づけるため、また、事前審査業務の効率を図るため、包蔵地・隣接地の改訂作業を随時実施しており、平成27年度は26件、36遺跡で実施した。遺跡の範囲拡大は4件、縮小は2件あり、16件で隣接地の解除を行った。また、平成27年度には1遺跡の新規登録を行った。

Ⅲ 発掘調査

1. 平成27年度の発掘調査

27年度の発掘調査件数は、表9に示したように、26年度からの継続事業7件、27年度新規事業50件の計57件で、このうち7件は平成28年度に継続である。文化財保護法第93、94条に基づく記録保存のための発掘調査55件のほか、92条に基づく学術調査1件、史跡整備に伴う調査1件を含んでいる。

57件の発掘調査総面積は17,529㎡で、前年度に比べ件数はほぼ横ばいで、調査面積は微減である。(表6・7)。公民別では公共事業が6,726㎡、民間事業が10,691㎡であり、民間が61%を占めた。公共事業総面積が前年度より337%増加する一方で、民間事業は32%減少している(平成24年度から、国立大学法人関係の調査は民間事業扱いとしている)。今年度も前年度に続き土地区画整理や圃場整備事業に伴う調査は行っていない。

個々の発掘調査の面積は、100㎡以下が24件、101～300㎡が10件、301～500㎡が9件、501～1,000㎡が10件、1,001～10,000㎡が2件で、10,001㎡以上の調査はなかった。300㎡以下の小規模調査は34件(60%)と、前年度の39件(70%)から件数・比率とも減少、1,000㎡以上の調査も2件に止まり、前年度より比率を7%から4%に減少している。1件あたりの平均調査面積は317㎡、公共事業で841㎡、民間事業では227㎡である。区ごとでは(表8)東区8件、博多区30件、中央区1件、南区5件、城南区9件、早良区7件、西区6件で、東区で5件増加している他は横ばいである。面積では、東区1,997㎡、博多区9,666㎡、中央970㎡、南区1,689㎡、城南区0㎡、早良区1,680㎡、西区1,527㎡である。東区で約1,500㎡増に対し、西区では約1,500㎡減と前々年度以来大幅で減少している。九州大学伊都キャンパス建設事業終了による。なお博多遺跡群、箱崎遺跡などでは複数遺構面調査のため、実際の発掘面積は増加する。

Ⅳ 公開活動

市民への公開を目的として、記者発表や現地説明会、体験学習および福岡市埋蔵文化財調査報告書の刊行等がある。平成27年度は博多区博多遺跡群第203次調査(地下鉄延伸に伴う)で7月18日に現地説明会を実施し、約100人の見学者が訪れた。また市内小中学校の体験学習の一端として発掘調査や整理作業への参加を受け入れており、平成27年度は、福岡市立城西中学校・那珂中学校・高取中学校の生徒8名を対象に市内の発掘現場及び整理室において、職場体験学習を行った。

公開・活用に資するための埋蔵文化財報告書刊行は、表10のとおり計27冊が刊行された。

V 平成27年度発掘調査概要および報告

調査概要・報告は表9の調査番号順に掲載し、位置番号は右ページの地図に一致する。また、各報文の図〔1、調査地点の位置〕の（ ）内は、左から福岡市都市計画図図幅番号・図幅名称・遺跡番号・縮尺である。

表5 発掘調査件数の推移（ ）前年度からの継続件数

事業	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
民間	21 (6)	30 (0)	27 (1)	22 (2)	42 (4)	50 (5)	47 (5)
園場整備	4 (0)	4 (2)	1 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
公共	16 (3)	16 (3)	23 (3)	19 (2)	5 (1)	6 (1)	8 (2)
合計	50 (9)	50 (5)	51 (7)	41 (4)	47 (5)	56 (6)	55 (7)

表6 発掘調査面積の推移 (m)

事業	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
民間	11,190	15,649	6,175	15,333	20,293	15,786	10,691
園場整備	0	9,774	1,984	0	0	0	0
公共	33,099	22,856	15,322	14,440	3,315	1,996	6,726
合計	44,289	48,279	23,481	29,773	23,608	17,782	17,417

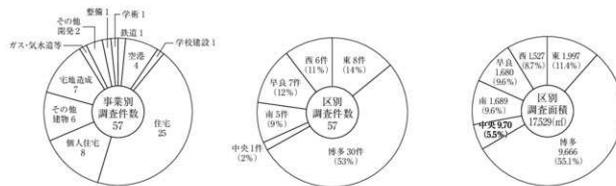


表4 発掘調査内訳



1. 有田遺跡群
2. 飯倉B遺跡
3. 井相田A遺跡
4. 大牟田古墳群
5. 上月隈古墳群
6. 警弥郷B遺跡
7. 顕孝寺遺跡
8. 元寇防壁
9. 雀居遺跡
10. 雑餉隈遺跡
11. 山王遺跡
12. 下山門遺跡
13. 住吉神社遺跡
14. 都地遺跡
15. 那珂遺跡群
16. 野方平原遺跡
17. 野多目C遺跡
18. 博多遺跡群
19. 箱崎遺跡
20. 原遺跡
21. 比恵遺跡群
22. 福岡城跡
23. 福岡城下町遺跡
24. 藤崎遺跡
25. 宮ノ浦畑中遺跡
26. 麦野A遺跡
27. 席田青木遺跡
28. 元岡・桑原遺跡群
29. 弥永原遺跡
30. 吉塚遺跡
31. 立花寺遺跡

表7 平成27年度調査一覧（前年度からの継続含む）

調査番号	道跡名	次数	調査原因	区	所在地	調査開始 (年)	調査終了	道跡 種別	地点	位置 番号
1427	博多道跡群	203	地下鉄延伸	博多	福岡市内	1490	H26.10.1	H27.10.31	HKT	18
1435	福岡城下町道跡	1	共同住宅	中央	赤坂1丁目174番1他6番	970	H26.12.15	H27.4.30	FUM	23
1436	赤木原道跡	11	宅地造成	南	白旗3丁目123-1, 124, 127-1	686	H26.12.15	H27.4.30	YNB	29
1438	野多目C道跡	6	宅地造成	南	野多目4丁目277, 278-1, 285-1, 286, 287-1	883	H27.1.6	H27.4.16	HKT	17
1442	箱崎道跡	72	共同住宅	東	箱崎1丁目26184, 26528, 26548, 12, 13, 14	97	H27.1.20	H27.5.22	HKZ	19
1448	比志道跡群	136	共同住宅	博多	博多駅南3丁目40番1	258	H27.3.2	H27.4.10	HIE	21
1449	博多道跡群	204	共同住宅	博多	古門町53番1	37	H27.3.9	H27.7.17	HKT	18
1501	箱崎道跡	73	共同住宅	東	箱崎1丁目2708番, 2708番2	310	H27.4.6	H27.8.10	HKZ	19
1502	箱崎道跡	74	個人住宅	東	坂出5丁目118番1	37	H27.4.6	H27.4.21	HKT	19
1503	比志道跡群	137	共同住宅	博多	博多駅南4丁目153-1, 153-6, 153-7	157	H27.4.1	H27.5.29	HIE	21
1504	有田道跡群	259	障壁工事	早良	小田部2丁目22番	65	H27.4.27	H27.5.1	ART	1
1505	那珂道跡群	156	治水対策事業	博多	竹下3丁目28番1	353.7	H27.5.1	H27.7.31	NAK	15
1506	箱崎道跡	75	個人住宅	東	箱崎1丁目2086番1-3-4, 2086番1-6	136	H27.5.18	H27.7.4	HKZ	19
1507	箱崎道跡	76	個人住宅	東	箱崎1丁目2804番1	370	H27.6.1	H27.7.14	HKZ	19
1508	赤原道跡	15	空地整備	博多	福岡空港内大字赤原内	600	H27.6.1	H27.12.17	ASA	9
1509	赤原道跡	16	空地整備	博多	福岡空港内大字赤原内	1634	H27.6.1	H29.7.31	SAS	9
1510	下山門道跡	2	共同住宅	西	下山門西地753-1外	782	H27.6.9	H27.7.31	SYT	12
1511	井根田A道跡	2	共同住宅	博多	井根田3丁目4番7号	25	H27.6.10	H27.6.18	ISA	3
1512	飯倉B道跡	3	個人住宅	早良	飯倉5丁目150番2, 150番7	60.6	H27.6.22	H27.7.10	KRB-B	2
1513	比志道跡群	138	共同住宅	博多	山王2丁目44番3, 45番	303	H27.6.29	H27.9.9	HIE	21
1514	那珂道跡群	157	障壁	博多	那珂1丁目525番	24.7	H27.7.1	H27.7.5	NAK	21
1515	箱崎道跡	38	店舗・共同住宅	早良	箱崎1丁目4番, 5番1	88	H27.7.14	H27.7.31	FUA	24
1516	比志道跡群	139	共同住宅	博多	博多駅南4丁目42-1, 46-1	489.12	H27.7.15	H27.10.30	HIE	21
1517	比志道跡群	9	共同住宅	博多	山王2丁目18番3	120	H27.7.27	H27.9.11	SNN	11
1518	有田道跡群	260	宅地造成	早良	小田部2丁目56番の一部	86.79	H27.8.5	H27.8.7	ART	1
1519	箱崎道跡	77	共同住宅	東	箱崎1丁目2707, 2707-3, 2708-1	333	H27.8.20	H28.2.10	NAK	19
1520	山王道跡	10	社屋	博多	山王2丁目4-4, 1-2, 2-2, 3-4, 4-2	996	H27.8.24	H28.2.26	HIE	11
1521	立花寺道跡	9	共同住宅	博多	余の隈1丁目1028-2, 1030, 1031, 1032	176	H27.8.24	H27.8.27	RGK	31
1522	野方平原道跡	3	宅地造成	博多	野方6丁目577番3, 578番3, 580番1	361	H27.9.2	H27.10.20	NKH	16
1523	立花寺道跡	10	個人住宅	博多	余の隈1丁目1020番	32	H27.9.15	H27.9.25	ART	31
1524	支野A道跡	25	個人住宅	博多	支野3丁目2番6	32	H27.9.28	H27.10.9	MGA	26
1525	支野・赤原道跡群	66	学校建設	博多	大字元岡1315番2	167	H27.9.29	H27.10.8	MOT	28
1526	原道跡	34	共同住宅	早良	原6丁目1188番15	520	H27.10.13	H28.2.2	HAA	20
1527	有田道跡群	261	共同住宅	早良	有田1丁目28番1	141	H27.10.13	H27.10.23	ART	1
1528	比志道跡群	140	共同住宅	博多	博多駅南4丁目62番-63番	441.8	H27.10.26	H28.1.14	HIE	21
1529	那珂道跡群	158	共同住宅	博多	那珂1丁目496番	231	H27.11.9	H28.1.22	NAK	15
1530	有田道跡群	262	宅地造成	早良	小田部2丁目49, 50, 51, 53 (5-21)	719	H27.11.4	H28.2.3	ART	1
1531	元寇防塁	11	史跡整備	西	大字今津地内	108	H27.11.4	H28.2.15	GKB	8
1532	赤原道跡	17	空地整備	博多	福岡空港内大字赤原内	900	H27.11.4	H28.2.26	SAS	9
1533	住吉社道跡	4	共同住宅	博多	住吉2丁目302番3, 310番2	333	H27.12.21	H28.3.12	SYJ	13

調査番号	道跡名	次数	調査原因	区	所在地	調査開始 (年)	調査終了	道跡 種別	地点	位置 番号
1534	赤木原道跡	12	宅地造成	南	白旗3丁目126番1	81	H27.12.7	H28.1.6	YNB	29
1535	那珂道跡群	159	個人住宅	博多	東光寺町1丁目146番5	82.36	H27.12.9	H27.12.14	NAK	25
1536	箱崎道跡	20	個人住宅	博多	箱崎南2丁目20	12	H27.12.16	H27.12.16	ZSK	10
1537	御幸寺道跡	1	宅地造成	東	多々良1丁目740番, 739番, 722番, 735番, 734番3, 748番, 746番, 747番,	720	H28.1.12	H28.7.10	KKG	7
1538	箱崎道跡	78	共同住宅	東	箱崎1丁目2032-2	188	H28.1.12	H28.5.2	HKZ	19
1539	吉原道跡	14	個人住宅	博多	聖船4丁目405番2号, 405番3	63.6	H28.2.15	H28.3.18	YSZ	30
1540	立花寺道跡	11	保育園	博多	立花寺2丁目694-1, 694-3 ~ 6, 696, 697	90	H28.2.22	H28.6.30	RGK	31
1541	比志道跡群	141	共同住宅	博多	博多駅南6丁目23番5, 22番1	155	H28.2.22	H28.6.24	HIE	21
1542	那珂道跡群	160	共同住宅	博多	竹下5丁目110, 111, 112-1の一部	H28.2.17	H28.2.18	NAK	15	
1543	箱崎道跡	21	戸建住宅	博多	箱崎南2丁目20	55.6	H28.3.7	H28.3.30	ZSK	10
1544	大年田古墳群	3	学術研究	南	箱原1丁目1251-1253-1, 1254-1, 255番地	4	H28.3.5	H28.3.13	OMKA	4
1545	栗田青木道跡	9	共同住宅	博多	青木1丁目384番1-2, 385番, 386番, 387番	100	H28.3.7	H28.3.17	MAI	27
1546	有田道跡群	263	共同住宅	早良	小田部2丁目487番1	6	H28.3.10	H28.6.10	ART	1
1547	那珂道跡	9	留学寮・学生施設	西	大字宮浦大字元岡1476番, 大字宮浦字元岡1498番2	51	H28.3.14	H28.5.14	TZI	14
1548	宮ノ浦中道跡	1	個人住宅	西	大字宮浦大字元岡1476番	58	H28.3.14	H28.3.14	MNU	25
1549	上月隈古墳群	1	宅地造成	博多	上月隈6丁目487番1	400	H28.3.14	H28.3.29	KAT	5
1550	野芥原B道跡	7	共同住宅	南	赤木3丁目11番16	35.1	H28.4.2	H28.4.2	KYB	6

表8 平成27年度刊行報告書一覧

集 書 名	冊 数	収録調査番号	集 書 名	冊 数	収録調査番号
1277 井根田C道跡11	井根田C道跡群13次調査報告	1412	1291 博多156	博多道跡群第201次調査報告	1402
1278 白川堀1	白川堀道跡第1次調査報告	1342	1292 比志70	比志道跡群第130次調査報告	1338
1279 影塚古墳群2	影塚古墳群2号墳の報告	1444	1293 比志71	比志道跡群第131次調査報告	1341
1280 金武古墳群2	第8次調査報告	1212	1294 比志72	比志道跡群第132次調査報告	1411
1281 赤原10	赤原道跡第14次調査報告	1443	1295 比志73	比志道跡群第133次調査報告	1417
1282 箱崎道跡群8	箱崎道跡群第19次調査報告	1429	1296 比志74	比志道跡群第134次調査報告	1422
1283 山王道跡7	山王道跡第8次調査報告	1424	1297 比志75	比志道跡群第135次調査報告	1426
1284 高原道跡	第21次調査報告	1428	1298 支野A道跡8	支野A道跡群第22次調査報告	1318
1285 元寇防塁・寺町1番2号・那珂道跡	福岡西部地区地籍整理関係調査報告書	8348/8341/8520	1299 吉原11	吉原道跡第13次調査報告	1403
1286 那珂74	那珂道跡群第148-150 ~ 154次調査報告	1335/1406/1409/14	1300 史跡阿蘇道跡	阿蘇道跡第22-北組部分の調査(1) -	008/009/018/067/076/08/096/013/116/136/131
1287 那珂75	那珂道跡群149次調査報告	1401	1301 元岡・赤原道跡群26	第58次調査報告	1110
1288 博多153	博多道跡群第88次調査報告	9444	1302 元岡・赤原道跡群27	第18次・第60次・第64次調査報告	994/1306/1331
1289 博多154	博多道跡群第199次調査報告	1333	1303 箱崎道跡20	第38次調査	1515
1290 博多155	博多道跡群第200次調査報告	1339			

1509 雀居遺跡第16次調査 (SAS-16)

所在地	博多区大字雀居 (福岡空港内)	調査面積	1200㎡
調査原因	空港整備	担当者	吉田大輔
調査期間	2015.6.1～2016.3.15	処置	記録保存

位置と環境 調査地は、御笠川東岸の低平地に位置する。本調査地は、平成10(1998)年に発掘調査が行われた13次調査区と隣接しており、この調査では、古代～中世の水田や弥生～古墳時代の集落が検出されている。

検出遺構 16次調査では、4面の遺構面を確認した。第Ⅰ面は、標高約4.6mで、古代～中世の水田跡を検出した。水田はほぼ南北方向に長方形あるいは方形に区画される。第Ⅱ面は、標高約4.1～4.2mで古墳時代後期頃と考えられる水田を検出したが、第Ⅰ面の水田よりも残存状態が悪く、畦畔も部分的にしか検出されなかった。また、大量の土器の集中地点が2箇所見つかり、これらは、南側の13次調査区側の微高地から、北～西側の低地・低湿地に向かって廃棄されたものと考えられる。第Ⅲ面では、標高約3.8～4.0mの高さで弥生時代後期頃と考えられる水田が検出された。Ⅰ・Ⅱ面の水田と比較すると、面積が小さく、形もややびつである。第Ⅳ面は、標高約3.5～3.6mで、弥生時代中期前半頃の柱穴や土坑、河川を検出した。このⅣ面は調査区西側の一角でしか確認されていない。河川では、岸のカーブに沿うように杭が打ち込まれており、貯水遺構や護岸等の機能をもつ可能性がある。河川からは鉄や杭、板材等の木器も出土した。

出土遺物 調査で出土した遺物の主体は、第Ⅱ面の土器溜まりで出土した、弥生時代前期から古墳時代前期の土器器が主体で、この他に、舟形木製品や鉄等の農具、建築部材等の木製品や、石鏃、石斧、穂鋤具、砥石等の石製品、銅鏃、シカの角や獣骨等も出土した。

まとめ 今回の調査では、弥生時代から中世にいたるまで、断続的に営まれた水田と弥生時代中期の集落の広がり、当時の地形・土地利用の様相を知ることができた。



1. 調査地点の位置 (23 雀居 2633 1:8000)



2. Ⅱ面 土器溜まり検出状況 (東から)



3. Ⅲ面 水田検出状況 (南西から)

1516 比恵遺跡群第139次調査 (HIE-139)

所在地	博多区博多駅南4丁目42-1,46-1	調査面積	489㎡
調査原因	共同住宅	担当者	久住猛雄
調査期間	2015.7.15～10.30	処置	記録保存

位置と環境 比恵遺跡群は福岡平野中央的那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地し、調査地点は遺跡群中央北東部に位置する。周囲標高は南側道路面で6.5m前後、調査区北西で6.6m、北東で6.2mであり西側と南西側がやや高い。調査範囲は南西側および北側のⅠ区と、中央南側のⅡ区に分けている。敷地東半は事前の試掘調査により深い攪乱が顕著とされ調査対象としていない。Ⅰ区北側東半は近世以降の水田により遺構面が深く削平され、Ⅰ区北側東半南部とⅡ区東半は現代の建物基礎による削平が著しく、遺存した遺構は僅かであった。他にも大きな攪乱坑が一部にあったが、総じて非常に濃密な遺構が認められた。遺構の遺存良好な範囲では、現代のバラスや盛土を10～30cm除去した鳥栖ルーム上で遺構を検出した。

検出遺構 プラン不確定なものを含むが竪穴遺構(主に住居)が推定30以上、土坑多数、柱穴多数、井戸1基、溝状遺構6条がある。遺構の大半は弥生時代中期から古墳時代前期だが、一部は古墳後期～飛鳥時代、また近世以降のものがある。溝は弥生～古墳前期が2条、古墳後期が1条、他は近世以降である。

出土遺物 弥生土器と古墳前期の古式土器器が大半で、他に古墳後期～飛鳥時代の須恵器、土器器、近世以降の陶磁器などがある。また、弥生～古墳の鉄製品、ガラス小玉、石器がある。遺構の濃密さや周囲の状況に比べると遺物量は比較的小なかつた。

まとめ 竪穴住居は弥生後期から古墳前期で、弥生後期と弥生終末期以降では方位の傾向が異なるが、これは南西側に分布する「環濠」群の変遷と関係する可能性がある。多数の柱穴には掘立柱建物や復元できるものがあり、SB01とした1×1間の古墳前期の建物は、柱穴掘り方が径1mと大きく井戸のような深さであり、「物見櫓」的な柱の高い建物と推定できる。また周囲で多い井戸が1基と少なく、比恵遺跡群の各地区における土地利用の差異を考える上で興味深い成果となった。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 127 1:8000)



2. Ⅰ区西側～北西側調査区 (東から)



3. Ⅱ区およびⅠ区南西側調査区 (北西から)

1519 箱崎遺跡第77次調査 (HKZ-77)

所在地 東区箱崎1丁目2707-3,2708-1

調査面積 333㎡

調査原因 共同住宅

担当者 清金良大・松崎友理

調査期間 2015.9.28～10.9

処置 記録保存

位置と環境 箱崎遺跡は博多湾岸に形成された箱崎砂層と呼ばれる古砂丘上に立地している。今回の第77次調査はこの箱崎遺跡の中央よりやや北に位置する。今回の調査では調査区をⅠ～Ⅳ区に分け、調査区内で確認された表土・茶褐色土・灰褐色土・暗灰褐色土（第1面目）・黄黒色砂質土（第2面目）・黄褐色砂（地山）のうち、地山より上面の2層を発掘調査した。

検出土構 布掘柱穴列や井戸、溝、土坑などが検出された。調査区東側の2棟の布掘柱穴列では柱の支えとなる礎石と考えられる列石も見つかっている。規模は1棟が4m×2m、もう1棟が6m×3mである。建物上部の構造は不明だが、蔵のような建物であった可能性がある。井戸は全部で9基検出され、うち1基で木枠を組み合わせてつくった方形の井筒が見つかった。

出土遺物 12～13世紀頃の土師皿や坏、青磁や白磁の皿や碗、滑石製の石鍋、釘や工具などの鉄製品が出土しました。他にも第1面目では100枚近くの銅銭や滑石製の「權（秤に使用するおもり）」、肩より上部を欠損した金銅装の仏像などが見つかった。

まとめ 今回の調査では12～13世紀の遺構や遺物が多く出土した。注目される布掘り柱穴列2棟は出土土器の年代から13世紀頃のものと考えられる。蔵の可能性が考えられる布掘り柱穴列が東側に2棟並んでいること、また、比較的大きな井戸が西側に多いことから当時の居住域における建物の配置などを考えることができる。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 1:8000)



2. 1区調査区全景 (西より)



3. 井戸井筒検出状況 (北より)

1524 麦野A遺跡第25次調査 (MGA-25)

所在地 博多区麦野3丁目2番6

調査面積 32㎡

調査原因 個人住宅

担当者 細石朋希

調査期間 2015.9.28～10.9

処置 記録保存

位置と環境 麦野A遺跡は御笠川とその支流である諸岡川に挟まれた中段段丘上に立地する。この段丘は花崗岩風化礫層を基礎とし、Aso4火砕流堆積による下層の八女粘土層及び上層の鳥橋ローム層からなる南北約1.2km、東西約0.4kmの洪積台地である。本調査区はこの東側斜面に位置する。

検出土構 竪穴住居跡1棟及び土坑6基を検出した。住居跡はその約2/3が調査区外の南西側にあり、検出面で一边約2.4mを測る方形プランである。深さは約50cmで、貳床は確認できなかったが生活堆積層と考えられる薄い混じり土の層を部分的に確認した。遺物は床面直上に立った状態で8世紀の須恵器長頸壺が出土している。土坑はいずれも平面形あるいは楕円形を呈し、径1.5～2.0m程のものが多い。深さは最も深いもので約80cmである。その内1基からは底部付近から8世紀の須恵器長頸壺が完形で出土したほか、古代の瓦質長頸壺、土師質の高坏が比較的確存状態良く出土しており、何らかの祭祀が行われていた可能性がある。

出土遺物 瓦質・須恵器の長頸壺や土師器高坏片等古代の遺物が中心。総量はコンテナ2箱分。

まとめ 竪穴住居跡の存在から当該地域周辺では古代において集落が営まれていた可能性が高い。土坑が多く、完形や残りの良い長頸壺が出土した為祭祀場等特殊な性質の施設があった可能性がある。



1. 調査地点の位置 (12 麦野 48 1:8000)



2. 調査区全景 (北西から)



3. 出土状況 (南から)

1529 那珂遺跡群第159次調査 (NAK-159)

所在地 博多区那珂1丁目496番
調査原因 共同住宅
調査期間 2015.11.9～2016.1.15

調査面積 231㎡
担当者 荒牧宏行
処 置 記録保存

位置と環境 調査地点是那珂遺跡群の南側に位置し、北東方向に傾斜していく。削平を受けているが、高い南西隅は標高7.7m、段落ちして低い北東隅は標高7.2mを測り、比高差50cmとなる。

検出遺構 検出された主な遺構は古墳後期(6世紀後半代)の竪穴住居跡5軒以上、中世の溝1条、段落ち、時期不明の土壇1基である。

出土遺物 出土遺物は6世紀後半代の須恵器、土師器が多く、コンテナに7箱分が出土した。

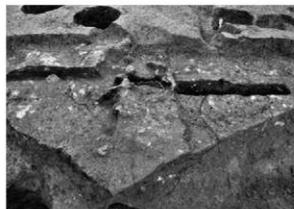
ま と め 竪穴住居跡にはカマドが設置されているが、3基検出されたなかで2基は特異な形状をなす。中世の段落ちは近接した調査地点において、中世後半期の濠が検出されているので、関連した遺構の可能性がある。時期不明の土壇は片方の端部をオーバーハングして掘り込んだ土壇である。土壇墓の可能性があり、前代の弥生から古墳初頭の時期か。周辺に古墳時代後期の集落は展開していくものと考えられる。中世後半期(戦国期)の段落ちは規模の大きい造成が行われたことを推測させる。また、弥生時代の可能性がある端部に掘り込みがある土壇は、類似する事例から土壇墓とも考えられ、周辺にも展開する可能性がある。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 85 1:8000)



2. 調査区の北側部分 (南から)



3. 竪穴住居内部につくられたカマド (南から)

1531 元寇防塁第11次調査 (GKB-11)

所在地 西区今津内
調査原因 内容確認
調査期間 2015.11.4～2016.2.15

調査面積 80㎡
担当者 蔵富士寛
処 置 現状保存

位置と環境 今津は博多湾の西北部に位置する。今回調査を行った今津地区の元寇防塁は、国の史跡に指定されており、毘沙門山の麓から柑子岳の麓にいたる約3kmの海岸砂丘上に存在する。防塁は現在の汀線から約90m内陸部へ入った砂丘上に築かれており、最高所は標高7mほどを測る。周囲には江戸時代以降に植林された松林が広がっている。調査地点は、国史跡元寇防塁(今津地区)の指定地東端部近くにあり、史跡内にある多目的広場の南西側に位置する。

検出遺構 石塁の現状確認を目的とする調査のため、多くは上面を検出するにとどめている。今回の調査では、長さ20m分の石塁を確認した。検出面における石塁の幅は2.5m程である。調査区の一部で行ったトレンチ調査では、高さ約2mの石積を確認している。また、石塁の検出時、白磁片などが出土した。

ま と め 今回の調査によって、この地点では石塁が良好に残存していることが確認できた。この成果は、今後史跡の保護に向けたさまざまな取り組みを行っていく上で、重要な資料となるだろう。



1. 調査地点の位置 (117 今津浜 116 1:8000)



2. 全景 (東から)



3. 石積確認状況 (北東から)

1533 住吉神社遺跡第4次調査 (SYJ-4)

所在地 博多区住吉2丁目302番3・310番2 調査面積 333㎡
 調査原因 共同住宅 担当者 屋山洋
 調査期間 2015.12.21～2016.3.12 処置 記録保存

位置と環境 住吉神社遺跡は福岡平野の中央部を流れ博多湾に注ぐ那珂川と、当時その那珂川と合流していた御笠川の河口付近に位置する筑前一宮の住吉神社を中心とする遺跡である。北側の博多遺跡群との間には旧御笠川の氾濫域が広がっているが、周辺は古くから市街地化が進んだため旧地形が判りにくくなっており、現在は氾濫域との境界は不明瞭である。4次調査地点は住吉神社本殿から200m北西に位置する。

検出土遺物 遺構面は粗砂を多く含む黄灰色シルトで厚さは20～50cm前後を測り、その下は粗砂層、砂礫層と続いていて、全体に河川による水成堆積である。遺構面の標高は1.3m前後で1次調査から1.2m程低くなっている。調査区内では12世紀から14世紀にかけての溝と井戸、掘立柱建物、土坑などが出土した。溝は大きく分けて2条みられるが、それぞれ数回の掘り直しが見られる。もっとも古い12世紀の溝からは白磁碗と土師丸地・皿、箸、曲げ物などが出土した。古い溝は現地割りと若干方位が異なるが12世紀後半～13世紀の新しい溝は現地割りとほぼ同じ方位である。掘立柱建物や布疋の塼も新旧の溝それぞれに沿った建物を検出した。井戸は調査区の北端部と南東部の2ヶ所で集中して出土した。素掘り、桶組、石組みと多様である。下駄などの木製品のもの、魚などの動物遺存体も出土している。



1. 調査地点の位置 (49 天神 2820 1:8000)



2. II区全景 (西から)



3. 石組み井戸 (西から)

1534 弥永原遺跡第12次調査 (YNB-12)

所在地 南区日佐3丁目126番1 調査面積 81㎡
 調査原因 宅地造成 担当者 朝岡俊也
 調査期間 2015.12.7～2016.1.6 処置 記録保存

位置と環境 弥永原遺跡は御笠川と那珂川などが形成した福岡平野にあり、那珂川中流域左岸の南北に八つ手状に伸びる丘陵地帯に位置する。本調査区は遺跡の北端の丘陵落ち際にあたると。調査区西側は11次調査区に接し、また道路を挟んで東側は春日市である。

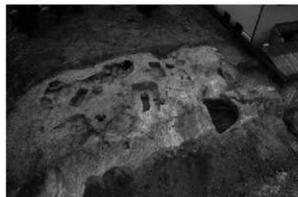
検出土遺物 弥生時代前期末～中期初頭の貯蔵穴を2基検出した。遺構面からの深さは2～3m程で、底面付近には黒色土が厚く堆積する。1基は床面に深さ80cm程の土坑を有する。また弥生時代の土坑墓を11基検出した。うち3基は2段掘りで、下段には木蓋をかけた痕跡が認められた。全ての土坑墓で副板痕跡などは認められず、明確な木棺墓は存在しない。土坑墓群の時期は、一部が貯蔵穴を切っており、弥生時代中期初頭以降と考えられる。

出土遺物 土坑墓群からはほとんど遺物が出土しなかった。貯蔵穴からは弥生時代前期末から中期初頭の土器が出土し、特に1基の底面付近では前期末の完形の壺が3つほど出土した。また玄武岩製始刃石斧や快入石斧、黒曜石製石鏃などの石器も多く出土した。

まとめ 隣接の11次調査と同様に弥生時代の貯蔵穴群が墓域に変化する様相を確認した。本調査区では土坑墓群を検出したが、壟が検出されず、墓の形態ごとに区域が隔るようだが、それが時期差か集団差かは明らかでない。当初は貯蔵穴群の利用が終わって墓群が形成され始めると考えたが、貯蔵穴の1基では上層で中期初頭の土器が出土し、貯蔵穴と墓群にやや併存期間があるかもしれない。



1. 調査地点の位置 (26 上日佐 105 1:8000)



2. 調査区全景 (西から)



3. 北東側土坑墓群 (南東から)

1537 顕孝寺遺跡第1次調査 (KKG-1)

所在地 東区多々良1丁目740番地

調査原因 宅地造成

調査期間 2016.1.12～7.18

調査面積 1,500㎡

担当者 荒牧宏行

処置 記録保存

位置と環境 多々良川河口近くの丘陵に位置する。丘陵部は標高7.8～17.7mを測り、谷部は標高5.9mまで下降している。

検出土遺物 検出された主な遺構は13世紀後半以降の中世屋敷、6世紀前半代の前方後円墳の周溝、弥生中期前半の甕棺8基、弥生前期後半の貯蔵穴41基、弥生前期後半から中期までの堅穴住居跡6軒以上が検出された。中世屋敷に関する遺構は柱穴のほか輸入陶磁器等を副葬した屋敷墓が3基、郭状の方形区画、小石を敷設した道等が検出された。前方後円墳は後円部径27m、全長42.5mとみられる。周溝内には土師器高坏と須恵器坏を組み合わせた祭祀遺物が検出された。特に重要な点として、全ての甕棺に赤色顔料の散布がみられ、4基の甕棺から細形銅剣3、細形銅矛3が出土した。丘陵頂部に有力集団墓が形成されているとみられる。また、前期に遡る貯蔵穴も丘陵頂部周辺で検出され、その大半の埋土に多量の焼土と灰が含まれていることから上層等の延焼が考えられる。弥生の住居跡は丘陵斜面で検出され、円形、方形両プランを呈す。



1. 調査地点の位置 (19 多田路 76 1:8000)



2. 全景写真 (北西から)



3. 前方後円墳の周溝内での墓前祭祀の土器群

1539 吉塚遺跡第14次調査 (YSZ-14)

所在地 博多区堅粕4丁目405番2,405番3,14番12号

調査原因 個人住宅

調査期間 2016.2.15～3.18

調査面積 63.6㎡

担当者 星野恵美

処置 記録保存

位置と環境 吉塚遺跡は、博多湾岸に沿っていくつも形成された古砂丘に立地する。最も湾に面した砂丘上には中世最大の国際貿易都市博多遺跡群を西端に東側には堅粕遺跡、吉塚本町遺跡、箱崎遺跡と、弥生時代から中世にかけての大規模な遺跡群が点在する。吉塚遺跡はこれらの砂丘列からひとつ内陸側の砂丘列にあり、その規模は南北900m、東西300m、標高は4mを測る。調査地点は遺跡南西部に位置し、調査区周辺は最も標高が高くなっている。

検出土遺物 地表面下0.6～1.2mの間に弥生時代中期から中世にかけての包含層が堆積する。包含層中で遺構面を3面確認したため、その都度調査を行った。最上層(第1面)では古代～中世、その下の第2面では古墳時代中期～古代、最下層(第3面)の砂丘面では弥生時代後期～古墳時代中期の遺構を主に検出した。第1面より確認していた古代の溝は幅1m、長さ9mを測り、調査区北側で立ち上がる。南側にかけては徐々に30cmほど深くなり、下層では水の流れた痕跡がわずかに窺える。また、古墳時代中期の土坑からは廃棄された高坏などが出土している。

出土遺物 出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、中国の陶磁器のほか黒曜石、石包丁があり、総量はコンテナ20箱である。

まとめ 今回の調査では、遺構が良好な状態で残っており、周辺の調査区と同様、弥生時代から中世までの遺構が連続と営まれていたことが判明した。また、出土遺物の石包丁は農耕、土師は漁業を営んでいた集落の様相を考えるうえで重要な資料となった。



1. 調査地点の位置 (36 博多駅 123 1:8000)



2. 北側調査区第2面全景写真 (東から)



3. 古代の溝 (東から)

1540 立花寺遺跡第11次調査 (RGG-11)

所在地 博多区立花寺2丁目694-1他

調査原因 保育園

調査期間 2016.2.22～7.8

調査面積 325㎡

担当者 久住猛雄

処置 記録保存

位置と環境 立花寺遺跡は、福岡平野の東に位置する月隈丘陵の南部西側斜面に立地する。丘陵斜面は開析作用が著しく、丘陵頂部を独立丘状に画し、その間は丘陵間の低い鞍部でつながるか、谷部により隔てられる。当遺跡周辺の月隈丘陵には、南側の国史跡金隈遺跡など弥生時代の遺跡が多い。

検出遺構 調査地点は丘陵間の鞍部に位置し、西側と北側が低い。周囲の標高は北側が15.2m、南側で19m前後である。11次調査は3次調査の東に接し、3次と同じく2面の遺構面を調査した。第1面はGL-70～10cmの飛鳥時代末前後の橙色土整地層の上部またはその直下の灰褐色～暗褐色土上面とした。第2面は第1面から20～30cm前後下げた灰黄色～黄褐色シルトまたは粘質土上面とした。この間には一部黒褐色土包含層を挟むが、これは旧流路上部埋没層や、東側では竪穴住居などの遺構重複層とみられる。第1面では古墳時代後期以降のピット、土坑、溝（水路）、第2面では古墳時代中期～飛鳥時代および弥生時代中期～後期のピット、土坑、竪穴住居、井戸、溝（水路、旧流路）を検出した。多数検出のピット群は、根固めや礎板状に礎を据えるもの、柱杭があるものが多く、建物や欄列の存在が推定される。第1面の水路は北流して遺構群を東西に画するが、西側の遺構面が高い。中世に複数回掘削されているが、第2面で当初掘削は飛鳥時代頃と判明した。第2面でこれを切る古代の井戸と、それとは別に弥生時代中期末～後期初頭の井戸を検出した。弥生時代井戸は検出面から-3m前後と深く、祭祀的な土器廃棄が複数あった。第2面中央では東西に走る3次検出の延長の旧流路があり、礎層で埋没後、弥生時代中期末～後期初頭に水路として複数回掘削された状況が把握された。水路底面は調査区中央が高く、湧水利用で東西両方向に水流する。この水路にも土器の祭祀的な廃棄が多く見られた。

まとめ 本調査では、弥生時代中期から中世までの居住関連および灌漑関連の遺構が検出された。特に第2面の弥生時代遺構群は、金隈遺跡の墓地に関わる人々の生活関連遺跡の可能性があらう。



1. 調査地点の位置 (11 金隈 38 1:8000)



2. 第1面全景写真 (南から)



3. 第2面全景写真 (南西から)

1541 比恵遺跡群第141次調査 (HIE-141)

所在地 博多区博多駅南6丁目23番5-22番1

調査原因 共同住宅

調査期間 2016.2.22～6.15

調査面積 495㎡

担当者 松崎友理

処置 記録保存

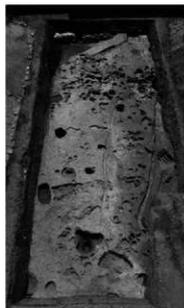
位置と環境 比恵遺跡群は那珂・御笠川流域間に所在する大規模な遺跡群の一つである。本調査区は比恵遺跡群の南端に位置し、那珂遺跡群との境の谷の落ち際にあたる。

検出遺構 調査区内は大きく傾平を受けており、遺構は八女粘土の基盤層で検出された。堆積層序は上から表土、整地土、旧水田土、八女粘土（地山）である。遺構検出面の標高は5.6～5.9mを測り、南側に向かって低くなっている。調査区は東西で二分し、西側をⅠ区、東側をⅡ区とした。Ⅰ区の南端では段落ちが検出され、標高4.6～5.0mの粗砂層で杭や樫とみられる木製品が出土した。主要な遺構としては井戸6基、溝5条、土坑、ピットなどが挙げられる。井戸6基のうち1基は古墳時代中期の須恵器や土師器が良好な状態で出土している。それ以外の井戸はいずれも7世紀代の井戸で、うち2基は最下面に1～3cm大の砂利を敷いていた。5条の溝のうち、調査区のほぼ中央を通る1条は調査区の東にあたる第125次調査地で検出された溝に続くと推定される。

出土遺物 今回の調査で出土した遺物は須恵器や土師器、土鏝などの土製品、紡錘車や滑石製白玉などの石製品などである。特筆すべき遺物としては獣脚面硯の脚部片が2点出土し、脚部の前下半には押捺施文による細かな紋様が認められる。2点の脚部片は胎土が異なることから、別個体のものと考えられる。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 127 1:8000)



2. Ⅰ区全景 (東から)



3. Ⅱ区全景 (南から)

1543 雑餉隈遺跡第21次調査 (ZSK-21)

所在地 博多区昭和町2丁目20番

調査面積 56㎡

調査原因 戸建住宅

担当者 清金良大

調査期間 2016.3.7～3.30

処 置 記録保存

位置と環境 雑餉隈遺跡は東を大野城市、西を春日市に挟まれた福岡市の最南端に位置しており、春日丘陵の東辺にほぼ平行して伸びる台地上に立地する。この台地は舌状台地を形成し、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡、麦野A・B・C遺跡に分かれる。すぐ隣を雑餉隈第12次調査で発掘している。

検出土遺物 主な遺構として竪穴住居3基、土坑1基を検出した。竪穴住居3棟の内1基は1辺約4mあり、深さ60～70cmと深く甍も付与されていた。遺物としては須恵器、土師器が出土し、時期は8世紀前半である。また、もう1基の竪穴住居は1辺約3m、深さ約10cmであった。北隣が第12次調査をしており、その時検出された大型の竪穴住居とはつながらない。遺物としては、須恵器、土師器が出土し、8世紀前半の年代である。また、土坑は直径約2m、深さ約10cmで円形である。

まとめ 雑餉隈遺跡では、広範囲に奈良時代の大規模な集落跡が展開しており、本調査区でもそれを補填する成果となった。



1. 調査地点の位置 (13 雑餉隈 54 1:8000)



2. 全景 (北から)

1545 席田青木遺跡第9次調査 (MAI-9)

所在地 博多区青木1丁目384番1・2外3章

調査面積 100㎡

調査原因 共同住宅

担当者 細石朋希

調査期間 2016.3.7～3.17

処 置 記録保存

位置と環境 席田青木遺跡は福岡平野東部の月隈丘陵北端付近に占地する。本調査区はこの西側に舌状に開いた支丘の斜面中腹に位置している。南西側は小さな谷地形となっており、調査区内で落ち際に確認できた。調査区全体は造成により削平されており、遺構面の標高は北端で最も高く9.9m、南端で最も低く8.9mである。第8次調査区のすぐ北に位置する。

検出土遺物 遺構は花崗岩パイラン土で検出した。弥生時代中期中葉～後半の円形竪穴住居跡1棟、溝3条、土坑1基、ピット状遺構多数を検出した。調査区北東側において、弥生土器を多く含んだ土の堆積を確認したが、その際はやや不明瞭かつ、非常に浅く肩が確認できなかった。際が凡そ弧を描いており、幾つかのピットが円形に並ぶことからこれを円形の住居跡と判断した。径は最低3m以上である。溝の内、北側の1条は幅0.6～0.8m、深さは北側で最も深く、約25cmを測る。須恵器が出土しており、中世に属する可能性がある。土坑は楕円形を呈し、長軸1.05m、短軸0.5m、深さは約20cmで、弥生時代中期中葉～後半の土器が出土した。

まとめ 出土遺物は全体で弥生時代中期中葉～後半の土器が多く、わずかに古代の土師碗や中世の須恵器が出土している。



1. 調査地点の位置 (13 雑餉隈 54 1:8000)



2. 全景 (北西から)



2. 全景 (南から)

1546 有田遺跡群第263次調査 (ART-263)

所在地 博多区小田部2丁目58番

調査原因 共同住宅

調査期間 2016.3.10～6.10

調査面積 242.9㎡

担当者 山本晃平

処置 記録保存

位置と環境 有田遺跡群は、福岡市の中央に広がる早良平野に立地する。本調査地点は、北へ八手状に分岐して広がる有田・小田部台地の一番東側に位置する台地の西側斜面上に位置する。遺構面である鳥居ロームは調査区の南から北に向かって少し傾斜している。調査区の南東側は表土から約60cm下で、北東側は表土下120cmで遺構面となる。

検出遺構 溝2条、及び柱穴、ピットが確認された。柱穴は明確に柱痕跡を残すものが多い。柱穴の分布から掘立柱建物は3棟確認できた。ただ大小の掘方の柱穴、深い柱穴が多数検出されたため重複して掘立柱建物が分布する可能性がある。これらの遺構の時期は、出土遺物が断片ため断定はできないが、古墳時代から中世前半と推定される。その他、旧石器時代から縄文時代頃の黒曜石の剥片と石鏃が出土しており、近辺に当該時期の包含層が存在していた可能性がある。

まとめ 以上の所見から、本調査地点には、古墳時代から中世前半にかけての掘立柱建物を中心とする集落が展開していたと考えられる。また黒曜石片などの出土から、旧石器時代から縄文時代の生活痕の存在が推定される。



1. 調査地点の位置 (82 原 309 1:8000)



2. 調査区全景 (南から)

1511 井相田A遺跡第2次調査 (ISA-2)

所在地 博多区井相田3丁目4番7号

調査原因 長屋住宅建築

調査期間 2015.6.10～6.19

調査面積 40㎡

担当者 清金良太

処置 記録保存

1. 調査に至る経過

平成27年3月17日付けで、当該地における埋蔵文化財の有無についての照会文書が提出された(事前審査番号26-2-1098)。平成27年3月30日に申請地の試掘調査を行ったところ、ピットを数基と溝を確認した。用途面積127.42㎡のところ、擁壁によって遺構が壊されてしまう北側の40㎡を調査対象とした。発掘調査は2015年6月10日から調査区の掘削作業を開始し、同年6月19日に作業を終了した。

2. 位置と環境

井相田A遺跡は福岡市博多区に所在し、市域の最南端に位置する。また、月隈丘陵、麦野丘陵に挟まれた沖積平野の低位段丘上に位置している。沖積平野は御笠川とその周辺から合流する牛頭川、諸間川などによって浸食され形成される。

今回の調査対象地は南側を第1次調査地点に近接しており、弥生時代～古代・中世の遺構が検出されており、遺構としては弥生時代中期の甕棺墓などが挙げられる。また、大野城市域と近接しており、仲島遺跡と一連の遺跡としてとらえることも可能である。

3. 遺構と遺物

第2次調査では、古代の竪穴住居が2棟、溝1条、井戸1基、その他ピットを数基検出した(図2)。

1) 竪穴住居(SC) S C 001(第3図)北側的一部分のみを検出した遺構である。長さは東西約2.7m、南北約0.7mが検出できた。深さは約8～10cmであった。

出土遺物(図4)1は弥生時代の鉢である。完形として出土し、口径14.3cm、高さ5.6cmを測る。内面はナデ調整、外面上部は横ナデ、下部はハケ目がみられる。2は須恵器の杯蓋である。外面上部は回転ヘラ削り、下部と内面は回転横ナデを施す。3は須恵器の高坏である。復元口径は約11cmである。内面外面共に回転横ナデの後に外面には5個1単位で刺突文を施す。4は弥生土器の高坏で復元口径は約14cmを測る。内面外面ともに研磨の跡がみられる。5は弥生土器高坏である。内面外面ともに研磨がみられ、杯部の外面下部にはヘラ削りの跡がみられる。6は土師器高杯脚部で、復元脚径は約11cmを測る。全体的に磨減が激しいが、内面の一部には横ナデがみられる。7は弥生土器の壺である。復元口径11.2cmを測る。口縁部は内面外面ともにナデ、外面頸部は太いハケ



1. 調査地点の位置 (12 麦野 52 1:8000)

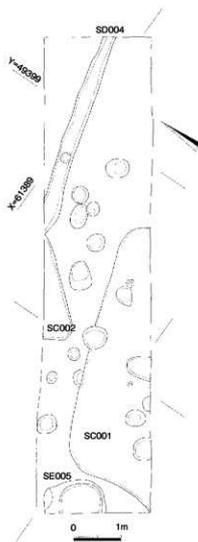


図2 第2次調査区全体図 (1/80)

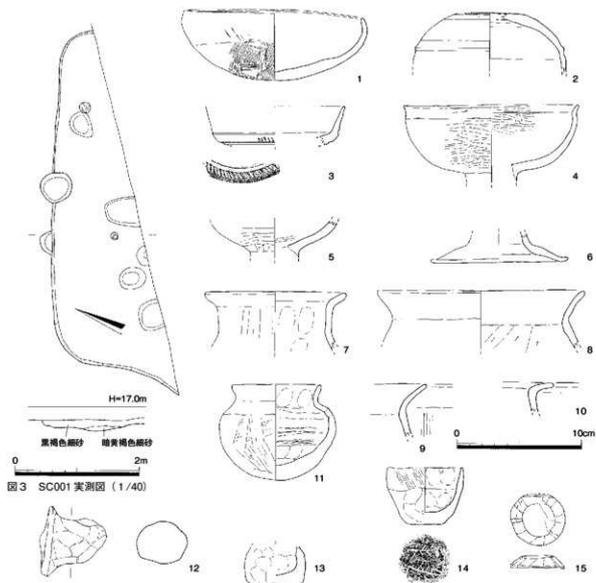


図4 SC001実測図(1/60)および出土遺物(1/3)

目を施す。内面はナデの後に指押さえがみられる。8は土師器壺の口縁部である。復元口径は16.6cmを測る。内面外面ともに口縁部から頸部にかけて横ナデ、内面はその下にタテ方向のヘラ削りがみられる。9、10は弥生土器甕の口縁部である。9、10ともに全面的にナデを施す。11は土師器小型壺である。口縁部の半分は反転復元である。復元口径は7cm、胴部最大径は9.3cm、高さ7.7cmを測る。口縁部は内面外面共に横ナデ、胴部はヘラナデ、ヘラ削りを施す。内面は指押さえの他、ヘラ先でひっかいたような跡がみられる。12は土師器甕把手部である。内面にタテのヘラ削りを施す。13、14はミニチュア土器である。13は底径4cmを測る。外面から底部にかけて雑なナデを施している。14は口径6cm、底径2.8cm、高さ4.6cmを測る。外面口縁部付近はハケ目、胴部から底部にかけて指押さえ、ナデがみられる。また底部はヘラ描きのような痕跡が認められる。15は未成品と思われる石製品で、滑石製である。上面径2.6cm、下面径4.3cm、高さ1.1cmを測る。

SC 002 (図5)

調査区の北側で一部を検出した。深さは約10cmである。出土遺物は破片ばかり出土したが、中には須恵器の破片も検出している。

SD 003 (図5)

東方向に走る幅約28cmの溝である。出土遺物は破片ばかりで図化できなかった。弥生時代の溝と考えられる。

SE004 (図5)

調査区の西端で検出した。深さ0.9～1m、幅約0.5～0.6mを測る井戸である。井戸の底部の黒褐色粘土層を取り除くと白色粘土層が検出され、湧水した。ただし、遺物は無く時期は不明で本当に井戸であるのか検討が必要である。

4. まとめ

今回の調査では堅穴住居が2棟、溝が1条、井戸が1基、その他ピットが出土した。遺物として図化できたものはSC 001のみであった。第1次調査で甕棺のほか、弥生時代～中世にかけての土器が出土しているが、第2次調査でも同じような結果となった。SC 001は弥生時代から古代にかけての遺物が出土しており、年代としては古代と考えたい。

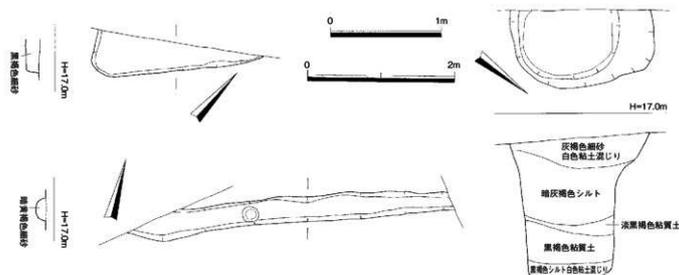


図5 SC 002、SD 004(1/60)、SE 005実測図(1/40)



写真1. 西側全景(南から)



写真2. SC001断面(西から)

1514 那珂遺跡群第157次調査 (NAK-157)

所在地 福岡市博多区那珂1丁目525番

調査面積 24.7㎡

調査原因 擁壁

担当者 池田祐司

調査期間 2015.7.1～7.5

処置 調査後削平

調査に至る経緯

平成27年6月9日付けで当該地における埋蔵文化財の照会があった(27-2-250)。照会地は平成26年8月5日に確認調査を行い、表土下15cmで包含層を、28cmの鳥栖ローム上面で遺構を確認していた。今回は30cmの盛土の後に共同住宅を建築する計画で、建物基礎による文化財への影響はないが、照会地西側に建設される擁壁の工事掘削が遺構面に及ぶものであった。協議の結果、擁壁工事の際に、文化財に影響がある部分について立会調査を行うこととなった。それ以外の部分は現状保存とした。

調査の記録

申請地は那珂八幡古墳の北側60mの丘陵上の住宅地に位置し、東側の公道からは35mほど入った平坦地で標高約6.7mである。敷地の東側の住宅地は1mほど低い。擁壁工事で掘削を行う範囲を、工事重機で遺構面まで掘削し、遺構の調査を行った。

現地表面下20cmほどの鳥栖ローム上面で遺構を確認した。遺構面は東へ低くなり、調査区南端で比高差70cmを測る。東側は隣地との間にブロック塀が築かれ、その建築時の掘方と考えられる掘方がみられる。調査区南側には爪バケツによる擾乱があった。検出した遺構は土坑1基、ピットなどである。

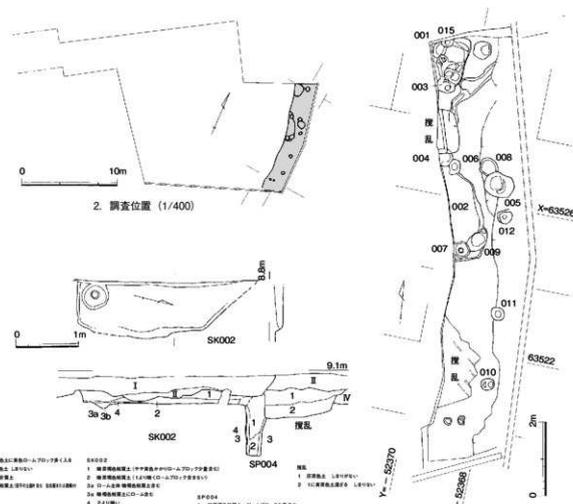
SK001 調査区北端に幅120cmほどの方形プランの一端を確認し掘削を開始したが6、または7基のピット群となった。上部10cmほどは暗褐色粘質土を主とした覆土であるが、それ以下は黄色ローム、茶褐色粘質土の混土を主とし、炭化物が広がる部分もある。ピットは遺構面から70cmほどの深いものが多い。2基では柱痕跡を確認した。遺物は弥生土器の小片がわずかである。図5-1は覆土上部で出土した土の底部で、器面は荒れている。

SK002 西側の調査区外に広がる土坑で、南東端は矩形を呈すが、北側は不整形で全体の平面形は不明である。深さは西側で25cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土を主体とする。床面は平坦でSP007を検出した。北端部ではSP004を切る。当初、住居跡と考えたが遺構の性格は不明である。遺物は少量の弥生土器が出土したが器面が荒れている。2は甕の口縁部外面に刷毛目が残る。傾きが不明確。3は甕の口縁部、4は鋤先口縁の甕である。他に赤色顔料を塗った破片がある。

ピット SP003からSP019はピット状の遺構で深いものが多い。SP003、013では径15cmほどの柱痕跡を確認した。建物等の柱になると考えられるが、調査区の範囲では把握できない。遺物は少なく小片で、ほとんどが弥生土器と考えられる。SP005は比較的多くの遺物が出土した。5は外反する口縁部の外面に刷毛目が残る。二重口縁甕であろうか。6は支脚で破片からの復元である。7はSP008出土で無頸壺か。いずれも器面が荒れている。8はSP003、9はSP004出土の鉄器で刀子と考えられる。

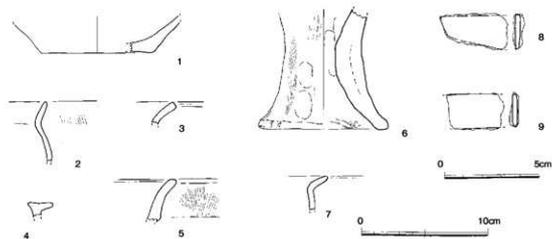


1 調査区地点位置図 (1/2500)



4. SK002・西壁土層 (1/60)

3. 遺構配置図 (1/100)



5. 出土遺物 (1/3, 1/2)

小結

限られた調査区であったため、各遺構の性格、時期は特定したいが、弥生時代中期から後期の集落が東側に広がっていることが想定できる。



Ph. 1 調査区全景 (北から)



Ph. 2 調査区全景 (南から)



Ph. 3 001 (西から)



Ph. 4 SK002 (西から)



Ph. 5 SK002周辺土層 (東から)



Ph. 6 北壁土層 (南から)

1518 有田遺跡群第260次調査 (ART-260)

所在地	福岡市早良区小田部2丁目56番の一部	調査面積	86.8㎡
調査原因	宅地造成	担当者	池田祐司・大森真衣子・清金良太
調査期間	2015.8.5～7	処置	調査後削平

調査に至る経緯

平成27年5月27日付けで当該地における埋蔵文化財についての照会があり(27-2-198)、同6月9日に確認調査を行い、鳥栖ルーム上面で土坑、ピット等の遺構を確認した。照会地の現状は平坦な宅地であるが、照会地北側の道路は西に向かって下がっており、敷地東端では道路と敷地の標高はほぼ同じであるが、西端では約1.2mの比高差がある。計画では敷地北側5.5mを道路の標高に合わせて掘削し駐車場として利用する計画であった。遺構面も西へ向かって下がるが、東側では北側道路よりも高く、西端部では道路よりも低い関係にある。協議の結果、駐車場で削平される部分のうち遺構面への影響が避けられない範囲について発掘調査を行うことで合意し、個人事業に対する国庫補助を受け発掘調査を行った。

駐車場部分のうち、西側約8mの工事による削平の影響を受けない部分と、南側の宅地部分に計画されている住宅建設工事は、文化財への影響がないため現状保存している。

調査の記録

申請地は有田遺跡群の東側に派生する丘陵の頂部から西側斜面に位置し、東端で標高9.7mを測る。敷地東側は客土直下で鳥栖ルームとなり旧地形は削平を受けている。東端から約8mより西では客土の下に黄茶褐色粘質土、若干の遺物を含む暗褐色粘質土が堆積し、調査区西端で暗褐色粘質土の厚さ20cmを測る。遺構は調査区西半に大型、小型のピットが広がり、東半は少ない。東半は削平を受けた遺構も多いと考えられるが、浅いピットもなく、西半に集中するピット群は広がらない。図3の道路部分には下水工事における立会調査の記録を示した。道路面下約30cmで鳥栖ルームとなるが、下水道、ガス管工事による攪乱の他に遺構は確認していない。

遺構は土坑とピットを確認し、特に大型のピットは柱痕跡を検出できるものがあり、掘立柱建物を復元した。以下、遺構ごとに記載する。

土坑 SK001 隅丸長方形の土坑で長さ206cm、幅120cm、深さ60cmを測る。途中、段を成し、底は70×50cmと小さい。覆土は黒褐色粘質土を主体とし下部ほどしまりが無い。遺物は外面刷毛目調整の土器片1点と、図5-1の古墳時代前期の高坏の脚部のみである。道路を挟んで北側で行った256次調査でも同様の遺構を検出し、古墳時代の土器片が出土している。形態と覆土から中世を想定しているが、明確な時期は不明である。

掘立柱建物 大形のピットを中心に4棟の掘立柱建物を復元した。狭い調査範囲内での想定であり確かなものもある。復元したものは柱筋が北から6°～12°西の方向で、地形に沿ったものと考えられる。

大型ピットは方形プランが多く、覆土は暗褐色粘質土を主体とし、鳥栖ルーム粒・ブロックを含んだり、鳥栖ルームと互層を成す。柱痕跡を残すものも多く、その幅12～15cmが主で20cmのものもある。柱痕跡の覆土は暗褐色を呈す。全体に遺物は少なく、小片である。

SBO41 東西2間、南北2間以上を想定している。東側の柱筋の北側延長の立会調査部分には遺構はみられず、北には広がらずに調査区内でおさまる可能性がある。東西長5m、南北長3.2cmほどの規模で、ピットは一辺60cmほどの方形、長方形でSP010は楕円形を呈す。深さは東側が40cm、西側が15cmほど残り、底の

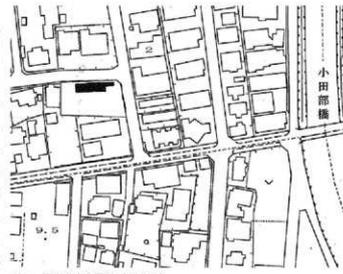
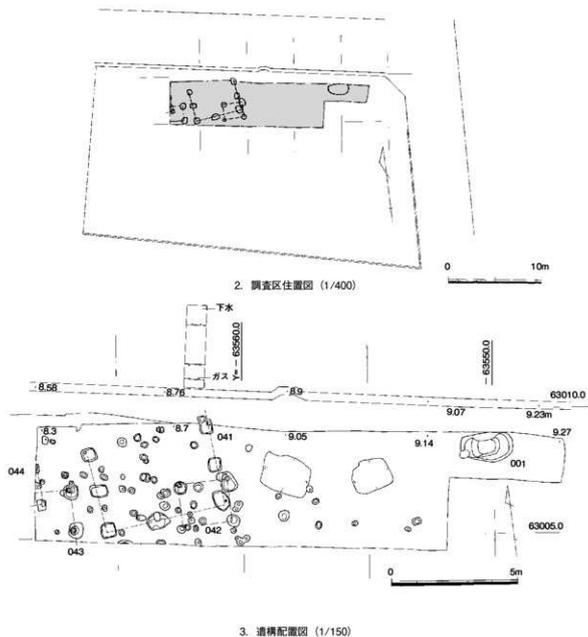


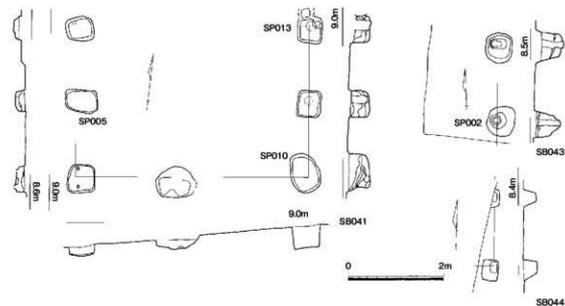
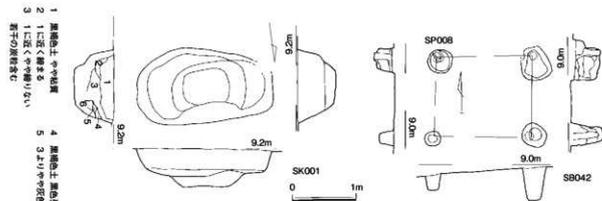
図1 調査地点位置図 (1/2500)



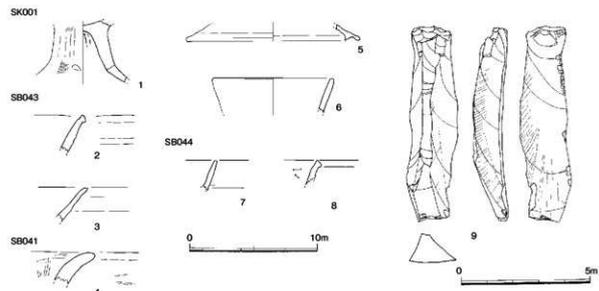
レベルは西側が10cmほど低い近いレベルである。遺物は土師器、須恵器の小片が出土した。4はSP005出土の土師器の甕で内面に刷毛目状の擦過が残る。5、6はSP010出土の須恵器で、5は蓋1/8からの復元口径13.6cm、6は壺等の口縁で小片からの復元である。他に土師器、須恵器の小片が出土している。

S B 0 4 2 1間×1間の建物を想定した。柱間隔は東西200cm、南北170cmほどで、ピットの掘方は直径45から50cmの平面円形を呈し、深さ45cmから60cmを測る。南西隅のピットは小型で浅く他と異なり、同じ建物の柱としては異質であるが、他に展開が想定できず、図のように復元した。遺物は土師器の小片と、SP008から鉄滓の小片1が出土した。

S B 0 4 3 二つの同規模の方形ピットが90cmを隔てて並び、西側と南側に展開する建物を想定している。ピットの掘方は一辺60cmほどで深さ57～62cmを測り、径13cmほどの柱痕跡を持つ。須恵器、土師器の小片が出土した。2、3はSP002からの出土で、2は須恵器の甕または壺の口縁部で歪みがある。3は土師器の坏の口縁部である。



4. 検出遺構 (1/60, 1/80)



5. 出土遺物 (1/3, 2/3)

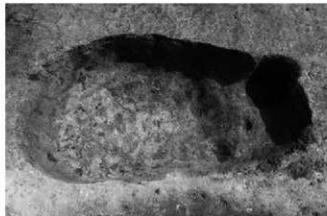
SBO44 調査区西端で検出したピット二つが同規模で西、北側に展開する建物を想定した。ピットは45×35cmほどの方形で深さ40cm弱である。7はSP033出土の須恵器の口縁部である。他に土師器の小片が出土している。

その他の遺物 8は須恵器の口縁部で器面は橙色を呈す。9はSP010出土の黒曜石の剥片で、長さ7.7cm、幅1.9cm、厚さ1.15cmを測る。先端部は折れており、先端部側面には自然面が残る。基部側面には微細剥離がみられる。旧石器時代の所産と考えられる。黒曜石はSP013から石核1点が出土している。3面に自然面が残り、礫を含む小片である。

小結 限られた範囲であるが、方形のピットを中心に掘立柱建物を復元した。北側の256次調査においても同じ丘陵の西側斜面で建物群を検出しており、一帯に広がるものと考えられる。建物時期は遺物が少量で決め難い。時期が分かる遺物は図5の須恵器の蓋が下限で、7世紀末から8世紀初めを建物の時期と想定しておきたい。建物は重なるものがあり、複数の時期があることは確かである。浅い谷の奥まった斜面に営まれた古代の建物群が想定され、今後、南側の有田台地中央部に展開する官衙遺構との関係が注目される。また旧石器時代の遺物の出土は特筆できよう。



Ph. 1 調査地点全景 (北東から)



Ph. 2 SK001 (北から)



Ph. 3 ピット群 (南東から)



Ph. 4 調査区全景 (南西から)

1521 立花寺遺跡第9次調査 (RGG-9)

所在地	博多区金の隈1丁目1028-2,1030,1031,1032	調査面積	176㎡
調査原因	共同住宅建築	担当者	吉田大輔
調査期間	2015.8.24～8.27	処置	記録保存

1. 調査に至る経過

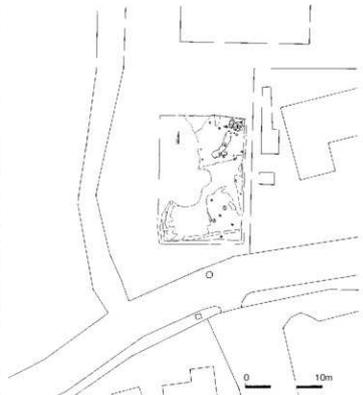
平成27年3月11日付で有限会社拓進から福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課宛てに福岡市博多区金の隈1丁目1028-2、1030、1031、1032における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会(26-2-1080)があった。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である立花寺遺跡内に位置しており、遺構が存在する可能性が高いと判断し、同年3月24日と7月24日に重機を使用して確認調査を行った。その結果、現地表面下20～50cmで包含層および溝や溝等の遺構が確認された。埋蔵文化財審査課では、この結果をもって建設に先立って発掘調査が必要であると判断し、申請者と協議を行い、建物建設部分については本調査を行って記録保存を図るということで両者の協議が成立した。以上を受けて同年8月24日から8月27日の期間で埋蔵文化財調査課によって発掘調査を実施した。



1. 調査地点の位置 (11 金隈 38 1:4000)

2. 位置と周辺環境

立花寺遺跡は、福岡平野の東縁にあり、糟屋平野との境を画する月隈丘陵の西側斜面上に立地する。第9次調査地は、立花寺遺跡の南西端に位置しており、現地形は南向きの傾斜地であり、現在は宅地造成されている。調査地の標高は約14.2mである。月隈丘陵には弥生時代から古墳時代、古代を中心とする遺跡群が展開し、立花寺遺跡ではこれまでに8次の調査が実施されている。本調査地周辺では西側の斜面地で5・6次調査が行われ、5次調査では弥生時代中期後半の井堰を伴う流路や古墳時代後期～飛鳥時代の総柱建物とこれに伴うと考えられる区画溝、中世の溝・井戸が検出された。6次調査では、弥生時代中期後半～中世にいたる遺構・遺物が確認されている。6面の遺構面が調査され、主体は飛鳥～奈良時代の遺構群であり、欄状遺構・掘立柱建物・土坑・溝が確認された。また、周辺調査での欄・倉庫群、初期貿易陶磁・瓦・楯等の検出事例からの周辺における礎田駅や官道が存在が想定されており、5・6次調査で出土している転用履や新羅土器等も遺構群の性格を考えるうえで示唆的である。



2. 調査位置図 (1/500)

3. 遺構と遺物

調査では、表土を現地表面下20～55cm掘り下げた黄褐色粘質シルト層で遺構を確認した。遺構検出面は、北から南に向かって緩やかに傾斜しており、標高は北側で13.3～13.5m程、南側で12.5～12.6m程を測る。ただし、

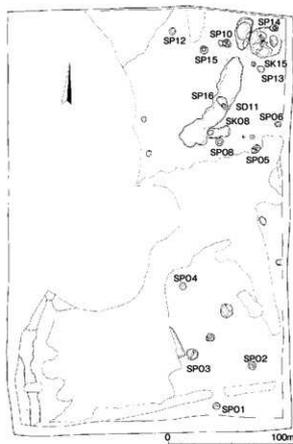
調査範囲の南・西側を中心に近・現代の建物解体時によるものと考えられる攪乱が著しく、特に北西側・南～南東側では大きく削平を受けていた。そのため遺構が確認できたのは、主に調査範囲の北東側である。

検出された遺構は、土坑2基、柱穴・小穴20基、溝1条である。柱穴は検出されたものの、建物としてまとめることはできなかった。柱穴は深さ20～25cm程度が残っていたが、溝や土坑は深さ2～10cm程度の残存状況であり、上部は大きく削平されているものと考えられる。遺構からは、弥生時代中期、古墳時代、古代（7世紀後半～8世紀）から中世（14～15世紀）のものと考えられる土器・土師器・須恵器・白磁片が出土したが、いずれも小片であり図化に堪えないものである。遺物は、コンテナケース1箱分である。

また、調査区の南西隅では、南西～西側へ向かって落ちる谷の落ち部分と考えられる落ち込みを確認した。この落ち込みには暗茶褐色粘質土が堆積しており、弥生土器片や古代～中世期の土師器・須恵器小片が出土した。

4. まとめ

調査地は既に大きく削平を受けていたが、土坑2基、柱穴・小穴20基、溝1条を検出した。出土遺物が少なく、また小片であったため遺構の時期は不明確な部分があるが、遺構の多くは古代（7世紀後半～8世紀）のものと考えられ、弥生時代中期、中世（14～15世紀）の遺構も含まれていると推定される。SD11は、現状では削平されごく浅いが、水が流れた痕跡はなく、区画を意図したものであった可能性がある。調査では、丘陵の南側斜面に展開していた弥生時代～中世にかけての遺構の分布を確認することができた。



3. 遺構配置図 (1/300)



4. 調査区全景 北から



5. 遺構検出状況 南東から

1523 立花寺遺跡第10次調査 (RGH-10)

所在地 博多区金の隈一丁目1020番

調査面積 33㎡

調査原因 住宅建築

担当者 屋山洋

調査期間 2015.9.14～9.25

処置 記録保存

1. 調査に至る経過

本調査は事前調査依頼（27-2-483）による。8月27日に確認調査を行い、現地表面から70～95cm下で遺構を確認した。申請地の敷地面積は260㎡を測るが現在前面道路から60cm程低く、盛り土を行うため建物基礎部分は調査対象外として南側住宅との境界の擁壁部分の幅3m、長さ15mを調査対象とした。実際には敷地東端は対象地への出入りに必要のため調査ができず、幅3m、長さ11mの約33㎡の調査となった。

2. 位置と環境

立花寺遺跡は福岡平野に面する月隈丘陵上に位置し、本調査区は西側へ傾斜する尾根上の狭い平坦面に位置する。

3. 遺構と遺物

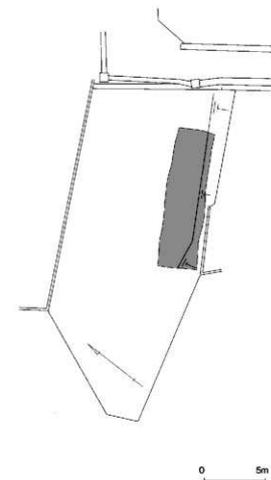
畑の造成時の削平と竹の根による攪乱が多く、遺構の保存状態は不良である。遺構は柱穴状の掘り込み18基を確認し、そのうち7基から弥生時代～古墳時代の遺物が出土した。遺構の詳細については表に記載する。

4. 小結

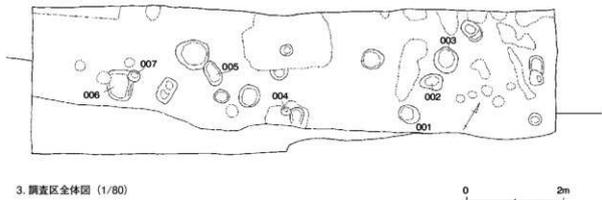
遺物は確認調査時に弥生時代中期後半の大型壺の割片が出土して掘削墓群の存在が予想されたが、本調査では確認できなかった。



1. 調査地点の位置 (11 金隈 38 1:8000)



2. 調査絵面図 (1/300)



3. 調査区全体図 (1/80)



4. 調査区全景 (東から)

遺構番号	性格	形状	長径×短径×深さ	時代	遺物
001	柱穴状遺構	楕円形	46×36×12	古墳時代	甕取手 (1点)、土器片 (2点)
002	柱穴状遺構	不正形	47×32×28	古墳時代後期	須恵器片 (1点)、土器片 (4点)
003	柱穴状遺構	円形	54×49×17	不明	土器片 (2点)
004	柱穴状遺構	楕円形	23×18×32	不明	土器片 (1点)
005	柱穴状遺構	楕円形	54×31×13	不明	土器片 (4点 1点は赤色顔料の痕跡有り)
006	柱穴状遺構	隅丸方形	65×52×23	不明	黒曜石割片 (1点)
007	柱穴状遺構	円形	24×23×29	不明	土器片 (1点)

5. 遺構一覧

1527 有田遺跡群第261次調査 (ART-261)

所在地 早良区有田一丁目28-1

調査面積 141㎡

調査原因 長屋住宅

担当者 井上蘭子

調査期間 2015.10.13～10.23

処置 記録保存

1. 遺跡の立地と環境

有田遺跡群は、福岡市の中央に広がる早良平野のほぼ中央部、鳥栖ロー層からなる独立した洪積台地上に位置する。東西0.7km、南北1kmの範囲に谷が入り組んだ八手状の平面形をなす台地である。本調査地点は有田遺跡群の中央やや南寄りに位置する。遺構面は、表土直下の鳥栖ロー層上面であり、後世の削平により遺構の残存状況はよくない。



第1図 調査地点の位置 (82 頁 309 1:8000)

2. 遺構と遺物

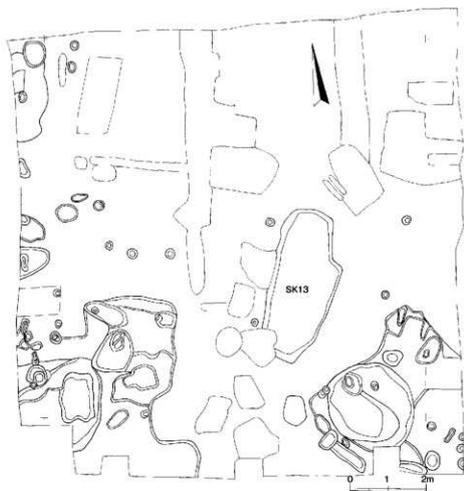
土坑、ピットが検出された。

SK13 (第4図) 調査区の中央やや南東寄りに位置する。長軸4.0m、短軸最大1.5m、深さ0.5mを測る平面長方形の土坑である。礫に混じって陶磁器、土師器片、土鍋、播鉢、砥石などが集中して出土している。

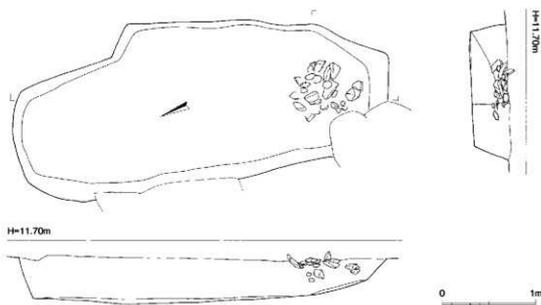
出土遺物 (第5図) 1は白磁碗の底部。底径4.0cm、残存高1.3cmを測る。見込みには柳描文を施し、内外面に透明釉をかける。高台底部は露胎となる。2,3は青磁碗の底部。2は、底径5.4cm、残存高1.6cmを測る。見込みには花文を暗文で描き、外面は片切彫りの蓮弁文を施す。オリーブ色の釉を内外面にかけるが、高台底部は一部にかかるのみである。3は、復元底径5.9cm、残存高2.1cmを測る。高台の内面まで淡青灰色の釉がかかるが、畳付きは釉を掻き取る。4は陶器碗。火入れと思われる。暗褐色ないし暗赤褐色の胎土で、外面には施釉されていた痕跡がある。残存高5cm、最大幅7.6cmを測る。5は土師器片の底部。底径8.4cm。糸切り離し底部で摩耗が激しい。6～10は土鍋である。6は復元口径27.0cm、残存高5.0cmを測る。内面に細かなハケム調整が施され、外面に一部煤が付着する。7～9も内面に細かなハケム調整がなされ、外面に煤が付着する。10は外面に一部煤が付着する。11, 12は土師質の播鉢である。11の復元口径は32.6cmで内面には5本単位の摺り目が入る。12の内面にも摺り目が入る。13は飯の甕手である。14は砂岩製の砥石。四面に砥面となり、残長12.7cm、幅4.5cm、厚さ3.9cmを測る。



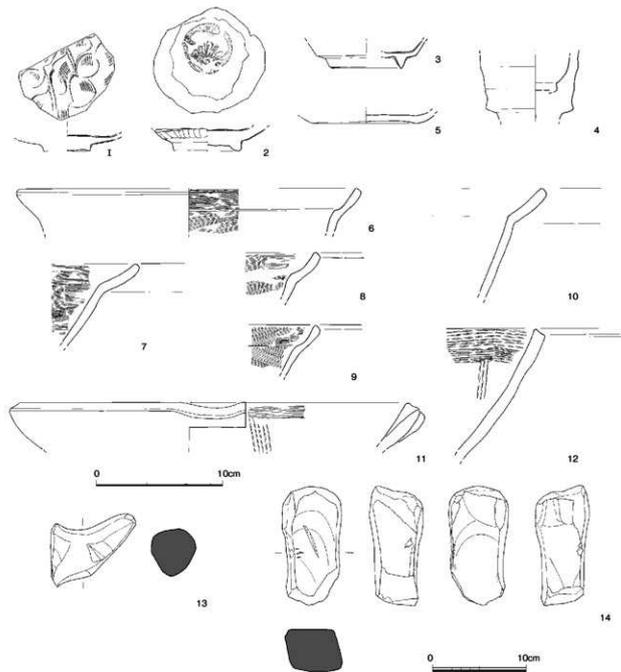
第2図 本調査地点と周辺の調査



第3図 遺構配置図 (1/100)



第4図 SK13実測図 (1/40)



第5図 SK13出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

3. まとめ

今回の調査では、遺構、遺物ともにあまり検出されなかった。しかし、周辺の調査では多くの調査成果が上がっており、当該地域における状況が明らかになっている。本調査地点の北側に位置する第53次調査地点では、16世紀末頃とされる濠の屈曲部が確認されており、この濠は東側に位置する第71次調査地点及び南側の第17次調査地点でも延長部分が検出されている。本調査地点は、この濠の内側に位置しており、濠の時期と合わせて、SK13は濠と関連した遺構と考えられる。しかし、他の遺構や遺物が確認されていないためどのような遺構群が展開していたかは不明である。ともあれ、本調査地点は、周辺地域と連動した集落が展開していたと考えられる。



SK13 (北から)



SK13 遺物出土状況 (北西から)



調査区南側全景 (東から)



調査区北側全景 (東から)

1535 那珂遺跡群第159次調査 (NAK-159)

所在地	博多区東光寺町一丁目146番5	調査面積	115㎡
調査原因	個人住宅	担当者	板倉有八
調査期間	2015.12.9 ~ 2015.12.14	処置	記録保存

調査に至る経緯

平成27年9月29日付けで、上記地135.49㎡について「埋蔵文化財の有無について(照会)」および「埋蔵文化財発掘の届出」が、福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課(当時)に提出された(事前審査番号27-2-616)。同課事前審査係では、周辺の試掘実績より遺構面をGL-20~45cmと想定した上で、工事面積が82.36㎡、基礎掘削が設計GL-15~35cmである本工事は、埋蔵文化財への影響は最小限に収まると判断し、10月1日付けで「工事立会」の旨の回答および通知を事業者(個人)宛てに発行した。その後、同係が同年12月7日に基礎工事に立会した結果、対象地の現況GLは周辺道路より約50cm高く、全体に約30cm切土した上での基礎工事であったため、当初の想定よりも埋蔵文化財への影響が大きいと判断し、基礎工事の中断および保存対応の協議に移った。協議の結果、敷地の性格上、GLを嵩上げすることができないため、基礎工事の影響を受ける部分のみの記録保存調査を実施することで事業者と合意した。

事業者および施工業者の協力のもと、12月7日、8日に遺構面上の表土約20cmを働き取り・搬出し、12月9日から14日まで一部の記録保存調査を実施した。また、15日から18日まで本工事の切土および基礎工事の立会を実施した。

調査の概要 (第2-3図)

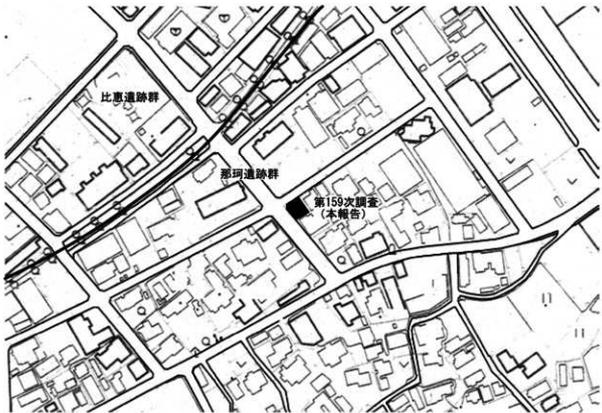
現況GL+20cm、道路面+30cmで明橙色粘土(鳥栖ローム)の遺構面となる。平面では西側および南側の一部に遺物包含層、中央部に方形竪穴建物、全体に柱穴を密に確認した。このうち、基礎工事の影響を受ける敷地東側部分を中心に埋土の掘削を行い、遺物を収集した。基礎工事の掘削が及ばない部分は、地耐力を低下させないため、また、遺構を地下保存するため、未掘としている。

方形竪穴建物 調査区中央で切り合った2棟以上を確認した。埋土は黒褐色粘質土で、出土遺物はすべて弥生土器もしくは古墳時代土師器で、須恵器等は含まれない。10は、SCI7出土の古墳時代前期の甕で、復元口径20.7cmを測る。8・9は、SC33出土で、8は高杯脚部、9は甕底部である。

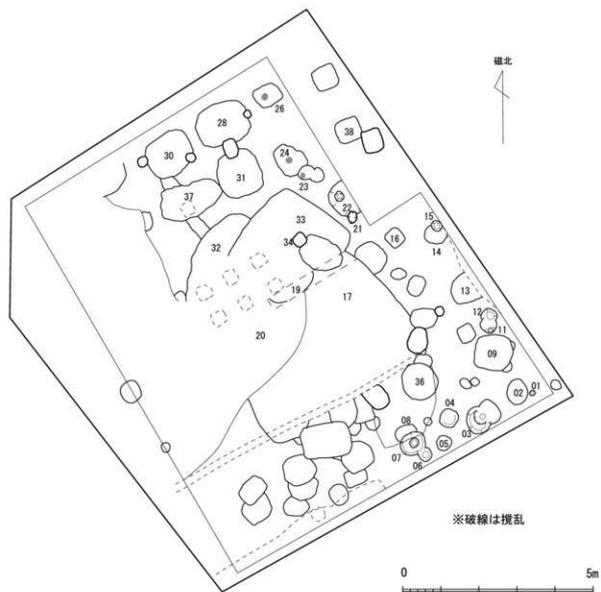
柱穴 直径が20cm前後、40cm前後、60cm前後、100cm前後、円形・方形とバリエーションがあるが、出土遺物は弥生土器もしくは古墳時代土師器で、須恵器等は含まれない。1は、直径60~70cmの楕円形柱穴SP03から出土した弥生時代中期後半の甕である。2は、直径約48cmの略方形柱穴SP07から出土した弥生時代中期後半の丹塗り小型甕である。3は、直径40~60cmの楕円形柱穴SP08から出土した弥生時代中期後半の広口甕である。4は、直径約40cmの円形柱穴SP12から出土した弥生時代中期後半の甕底部である。5は、直径約40cmの円形柱穴SP23から出土した弥生時代中期後半の甕である。6は、1辺60~80cmの方形柱穴SP26から出土した弥生時代中期後半の甕底部である。7は、直径約30cmの略方形柱穴SP34から出土した土師質土器である。その他、工事掘削時に出土した遺物もすべて土器小片で、総量はコンテナケース1箱分である。

まとめ

表層の部分的な掘削と記録であるため明確ではないが、弥生時代中期後半の活発な居住活動の痕跡が認められた。谷を挟んだ北側に比恵遺跡群を望む、那珂遺跡群の北端の様相を知る上でも、周辺の今後の情報の蓄積が期待される。また、対象地には埋蔵文化財が保存されており、将来の工事については引き続き文化財保護法にもとづく取扱いが必要である。



第1図 対象地の位置 (S=1/2,500)



第2図 対象地と工事範囲および遺構配置図 (S=1/100)



写真1 調査前切土工事 (北西から)



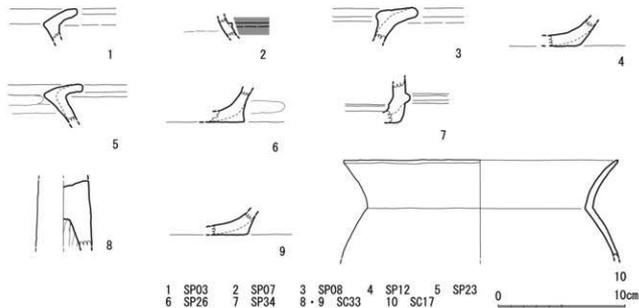
写真2 全景 (東から)



写真3 全景 (北西から)



写真4 調査後基礎工事 (南東から)



1 SP03 2 SP07 3 SP08 4 SP12 5 SP23
6 SP26 7 SP34 8・9 SC33 10 SC17 0 10cm

第3図 出土土器 (S=1/3)

1536 雑餉隈遺跡第20次調査 (ZSK-20)

所在地 博多区昭和町二丁目2番5

調査面積 12㎡

調査原因 個人住宅

担当者 板倉有太

調査期間 2015.12.16

処置 記録保存

調査の経緯と経過

平成27年11月12日付けで、上記地135.68㎡について「埋蔵文化財の有無について(照会)」および「埋蔵文化財発掘の届出」が、福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課(当時)に提出された(事前審査番号27-2-749)。同課事前審査係では、周辺の試掘実績より、遺構面は表土直下と想定した上で、11月24日に確認調査を行い、工事範囲の一部で遺構を確認した。事業者側との設計協議の結果、工事範囲の東端は基礎工事による埋蔵文化財への影響が大きいため、追加の確認調査をもって記録保存対応とすることで合意した。同年12月16日に記録保存調査を実施した。

調査の概要

現況GL+25cm、前面道路+5cmで明橙色粘土(鳥栖ローム)の遺構面となる。方形堅穴建物の西端一部を檢出し、その部分は完掘した。工事範囲のその他の部分は、確認調査から削平・擾乱によって遺構の大半が失われており、西側の遺構は工事の影響を受けないため、地下保存となっている。

堅穴建物 残存辺長3.4m、残存深さ30cmを測る。埋土は白色粘土(八女粘土)小ブロックを含む暗褐色粘質土で、床、壁に沿って小ビットを確認した。壁溝や貼床、主柱穴は確認していない。堅穴西辺中央のビットは、当初カマドの可能性を考慮して掘削したが、白色粘土、焼土、灰、袖、支脚やまとまった土器片などが検出されず、底部に柱の当たりが確認されたため、堅穴建物を切る隅丸方形の柱穴と考えられる。

出土遺物 堅穴建物から、土師器、須恵器がコンテナケース半箱分出土した。土師器は甕、須恵器は甕と高台付椀である。1・2・3は須恵器杯である。1は、復元高台径10cmを測り、外底に1.5mm幅の板目痕が残る。4は、須恵器高杯の杯部である。5は、土師器甕である。

まとめ

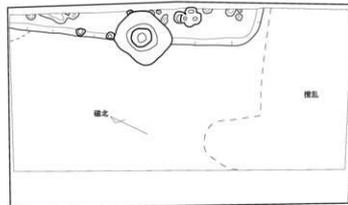
雑餉隈遺跡で調査例の多い方形堅穴建物を確認した。堅穴の本来の大きさを4m四方程度と想定すれば、今回調査は約1割の情報であり、建物の構造等の詳細は不明である。時期も明確ではないが、出土遺物からは8世紀後半と考えられる。遺構は敷地の東側に延びており、周辺の工事には引き続き注意が必要である。また、対象地西側には埋蔵文化財が保存されており、将来の工事については引き続き文化財保護法上の取扱いが必要である。



第1図 対象地の位置 (S=1/2,500)



第2図 対象地と調査区 (S=1/600)



第3図 堅穴建物 (S=1/50) 0 1m



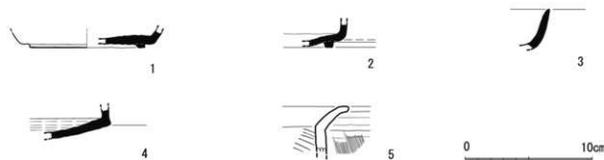
写真1 遺構検出(西から)



写真2 堅穴建物(西から)



写真3 堅穴建物土層



第4図 出土遺物 (S=1/3)

1542 那珂遺跡群第160次調査 (NAK-160)

所在地	福岡市博多区竹下5丁目110,111,112の一部	調査面積	16㎡
調査原因	共同住宅	担当者	池田祐司・加藤隆也・朝岡俊也
調査期間	2016.2.17-18	処置	調査後削平

調査に至る経緯

平成27年9月2日付けで当該地における埋蔵文化財の照会があった(27-2-543)。照会地では那珂遺跡第43次調査が行われており、土坑、ピット等が出土している。今回は43次調査範囲の南側部分に共同住宅の建築が計画され、既存建物の解体後の28年2月8日に確認調査を行い、溝などの遺構、遺物包含層を確認した。ただし既存建物範囲はすでに攪乱を受けており、新たな建築範囲はこの攪乱の影響で文化財は残っていないことを確認した。その後、既存建物範囲北側のエントランス部分の基礎が文化財に影響を与える可能性があるため、同2月17・18日に再度確認調査を行い、確認した遺構について記録保存を行った。

調査の記録

申請地は那珂遺跡群の西端に位置し、丘陵の落ち際にある。地表面(7.6m)から客土・旧耕作土を除去した鳥栖ローム上面(7.1~7.0m)で遺構を検出した。鳥栖ロームは黄色を呈し、粘質が強い下部にあたるもので、標高6.6m以下は白色の八女粘土となる。敷地南西端での試掘では地表下40cmで古代の遺物包含層、130cmで須玖式土器を比較的多く出土する包含層を確認したが、掘削できた200cmまでにローム層に達していない。

遺構は東西方向に走る中世の溝3条、弥生時代中末後初の井戸1基、ピットを確認した。

SD001 トレンチ北側を東西方向に走る溝で幅1.6~1.7m、深さ0.6mを測る。覆土は上部が灰茶褐色粘質土で、下部はこれに鳥栖ロームがブロック状に混ざり、一度に埋められたものと考えられる。底は平坦で幅1m前後で、北側の壁が急に立ち上がるのに対し、南側の立ち上がりはやや緩い。トレンチ東側ではSK002に切られる。遺物は遺構の規模の割に少なく、弥生時代から中世の遺物が出土している。図6-1は外反する青磁碗の口縁部でオリブ色を呈す。15世紀代か。2は白磁皿の底部で外面残存部分は露胎で内面には薄く釉が残るが表面は荒れている。3は糸切り底の土師皿で焼きがよく非常に硬質である。4、5は古代の瓦である。4は丸瓦の瓦頭部分で内区を欠くが縁の圓線がみられ、第32次調査等で出土している百濟系単弁瓦と考えられる。外面はなで調整の後に一部に擦痕がみられ、内面は布目圧痕と横方向の擦過がみられる。紫色がかかった茶色を呈し砂粒を多く含む。5は丸瓦で外面はナデ調整と若干の擦痕、内面には布目圧痕と木骨痕がみられ、灰色を呈し砂粒を多く含む。他に須恵器、土師皿、瓦質土器、弥生土器片、鉄滓が出土し、その中で土師皿が多い。限られた出土遺物からではあるが1の青磁碗、3土師皿からSD001の埋没時期を15世紀代とらえておきたい。

SK002 SD001を切る溝状の遺構で全体の形状は不明である。001と重なる部分を確認せずに掘削したが、土層から幅1mほどの規模がわかる。深さ60cmほどで覆土は灰茶褐色土と鳥栖ローム層が互層をなす。出土遺物は少なく瓦質土器、糸切底の土師皿、瓦質鉢片が出土している。

SD003 SD001の南を走る溝で、全体を把握できたのは西側70cmほどである。西壁土層の観察からSD006を切ることが分かるが、平面プランで両者の区別を把握できておらず、SD001と併行する溝の立ち上がりはSD006のものの可能性がある。西壁土層から把握できるSD003の規模は幅160cm、深

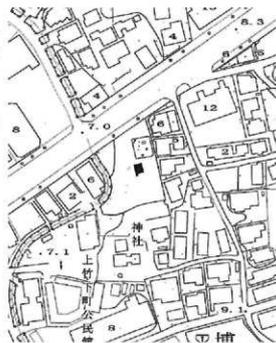


図1 調査区地点位置図 (1/2500)

さ45cmから60cmほどで、SD001と規模は近いが、底の幅は狭い。壁の立ち上がりはSD001とは逆に南側が急で北側がやや緩やかである。覆土は灰褐色土と鳥栖ロームの互層である。遺物は数点と少なく、SD006と混ざっている可能性がある。6は白磁碗V型の小片である。他に土師皿片、須恵器の甕、瓦質摺鉢片が出土している。

SPO04 径30cm深さ25cmのピットで、平瓦片7が出土した。7は淡褐色を呈し、外見は土師質で、砂粒を多く含む。内面には布圧痕を残す。

SE005 トレンチ南西端で検出した素掘りの土坑で円形プランの井戸と考えられる。西半は調査範囲外である。SD001に切られる。直径94cm、深さ110cmほどの規模を確認し、下部は八女粘土を掘り込み、鳥栖ロームとの境で幅が広がる。覆土上部は主に鳥栖ロームと灰茶褐色粘土の互層、中位からは八女ロームがブロック状の多く混ざっている。両側には八女粘土を含まない鳥栖ロームと灰茶褐色粘土層がみられ、井筒があった可能性を考えておきたい。覆土からは弥生時代の遺物が出土し、特に底部分からは大型の破片がまとまって出土した。ただし完形に復元できるようなものはない。8から12は底からの出土である。8、9は壺で外面全面に赤色顔料を施す。8は外面に縦方向の刷毛目がよく残り、内面は浅く細かな擦過痕の単位がみられる。9は外面に横方向の研磨を施し、内面はナデである。10は内湾する「く」の字形口縁の甕で器面の荒れが著しい。外面からの焼成後の穿孔がみられる。11は高杯、12は器台である。13から15は上部層からの出土で、13は縦方向の刷毛目を残す底部、14、15は鋤先口縁の甕片である。16は逆L字形の口縁部の甕で、同一個体と考えられる破片が多いが復元できるほどに接合しない。SE005は遺物から後期初頭と位置づけられよう。

SD006 SD003に切られる溝で、上端のプランは不明だが、幅35cm~50cmの底がSD003の底に併行して走る。西壁土層からは幅60cm前後の規模が想定され、立ち上がりは急である。覆土は灰褐色粘質土と鳥栖ロームの互層でSD003と類似する。遺物は確認できていない。

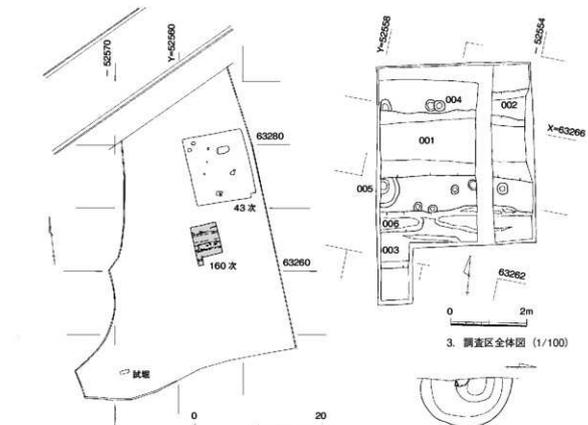
小結 那珂遺跡が広がる丘陵の西端部分にあり、敷地内で西に落ちるものと考えられる。その端部においても弥生時代からの遺構を確認した。併行する中世の溝SD001、003は、居館の堀の可能性もあろう。



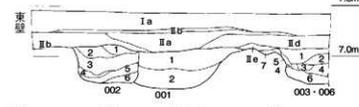
Ph.1 調査区全景 (東から)



Ph.2 SE005 (東から)



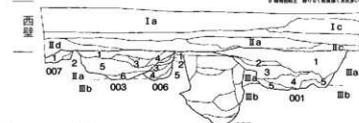
2. 調査区位置図 (1/600)



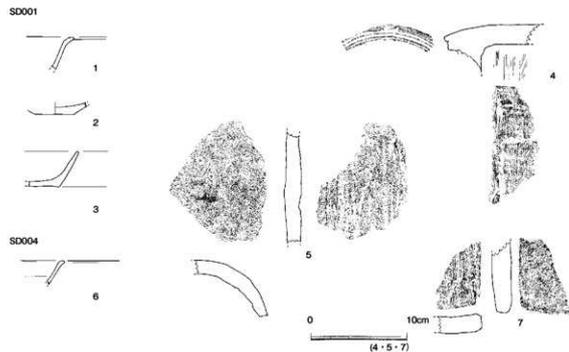
3. 調査区全体図 (1/100)



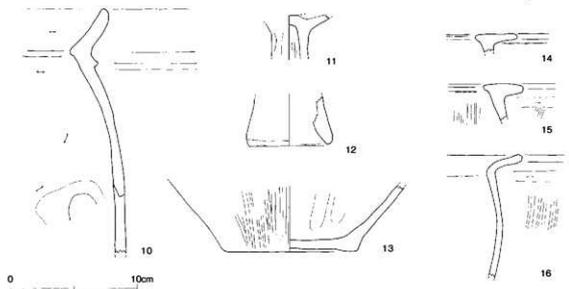
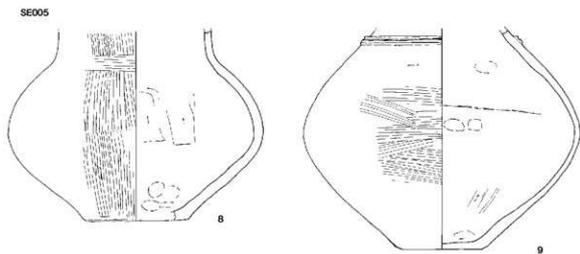
4. SE005 (1/40)



5. 土層図 (1/60)



6. 出土遺物 (1/3 1/4)



51

1549 上月隈古墳群第1次調査 (KAT-1)

所在地 博多区月隈六丁目488番2外3筆 調査面積 400㎡
 調査原因 宅地造成 担当者 板倉有太
 調査期間 2016.3.14～3.29 処置 記録保存

調査に至る経緯

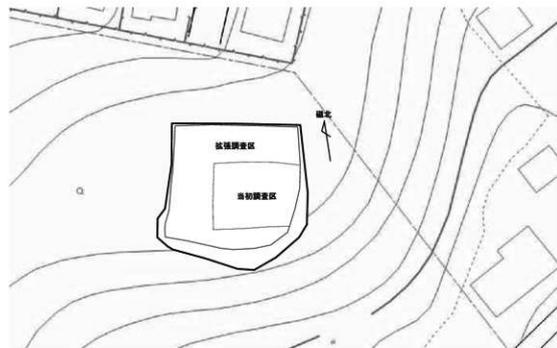
平成27年9月16日付けで、上記地のうち488番2、491番4(4,285.7㎡)について「開発計画事前協議申請書」が、株式会社アストより福岡市住宅都市局建築指導部開発・建築調整課を経て福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課(当時)に提出された(事前審査番号27-2-593)。対象地は上月隈古墳群の東側隣接地および包蔵地外であったが、同課事前審査係では、周辺の踏査報告や旧地形図の検討から、古墳が存在すると想定した上で、同年10月2日に現地踏査を行った。その際、開発区域内には埋蔵文化財の痕跡を確認しなかったが、開発区域の東側の487番1でコの字状に配置された大型礎と須恵器残片を採集し、古墳の存在を推定した(4号墳)。古墳自体は開発区域外であったが、関係する区域として工事用仮設道の設置工事が計画されていたため、仮設道設置工事に立会う旨と、開発区域については樹木伐採・抜根後に再度踏査を行う旨で事業者と協議を行った。関連工事範囲の伐採・抜根工事後、平成28年1月26日に市と事業者が現地で協議を行い、開発区域の東側敷地(古墳含む)9,260㎡について、形状変更(2m切土)を計画しているとのことで、土地所有者の承諾書提出を受けた上で、同年2月23日、24日に試掘調査を実施した。その結果、踏査で確認した古墳以外には埋蔵文化財は確認されず、対象地は昭和40年頃に大半が造成済みであることを確認した。古墳1基については新たに埋蔵文化財包蔵地に設定した上で、切土工事による破壊が免れないということで、古墳の遺存状態が悪いという点も考慮して、市が追加の確認調査による記録保存対応を行うこととした。



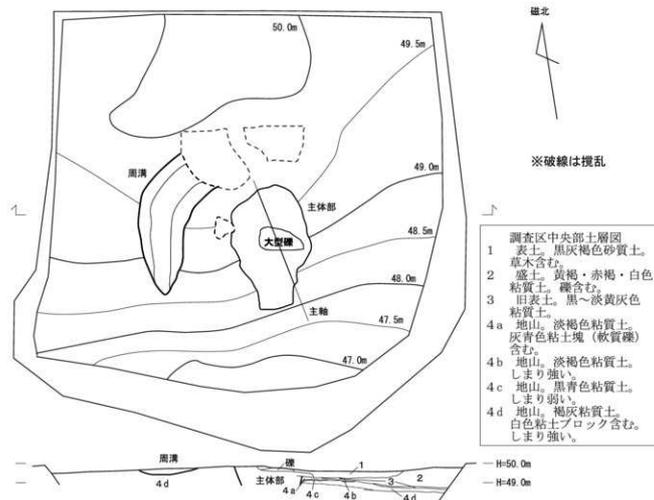
第1図 対象地の位置 (S=1/5,000)

調査の概要

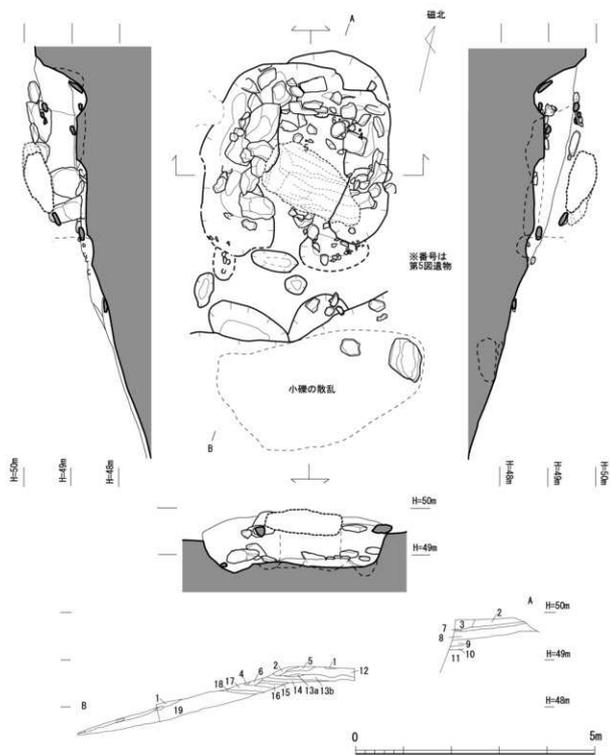
調査前に地表に露出していた大型礎は、調査の結果、現代の盛土上に再配置された石室石材と考えられ、墳丘は大きく削平され、周溝・石室の底部がかろうじて残った状態であった。なお、再堆積と判明した大型礎を重機で除去する際に、下部の大型礎も複数除去したが、それらから削平を免れた奥壁や腰石、袖石であったため、それらの出土状況の記録を取ることができなかった。



第2図 調査区と周辺地形 (S=1/600)



第3図 遺構配置と中央部土層図 (S=1/200)



1 盛土 (昭和40年代か)

(古墳覆土・埋土)
 2 淡褐色粘質土 3 淡褐色粘質土。黒色土ブロック含む。 4 3と同質
 5 灰褐色粘質土。ブロック土含む。 6 14の再堆積

(地山)

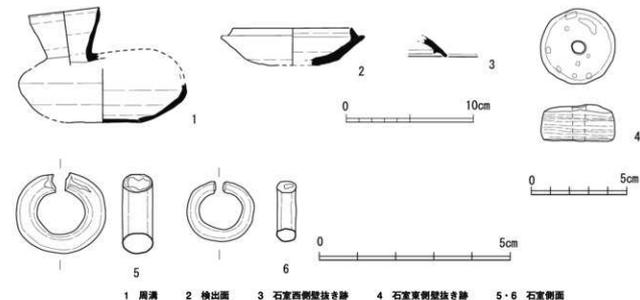
7 白青灰色粘土 8 暗青灰色粘土 9 黒青灰色粘土 10 淡褐色粘質土 11 白・黄色粘土
 12 白色粘土。黄色粘土ブロック含む。 13a 褐色粘質土 13b 黄色粘質土。白色粘土ブロック含む。
 14 白色粘質土。黄色粘土ブロック含む。12に類似。 15 黒青灰色粘質土 16 白青灰色粘土
 17 黄色粘土。16含む。 18 灰褐色砂質粘土。しまり弱い。 19 淡赤白色粘土礫

第4図 石室および土層実測図 (S=1/80)

周溝 周溝は北西部の約1/8が残った状態で全体形状は不明である。残存部分で幅2.5m、深さ25cm、石室中心より外半径で7mを測る。墓石や列石等は確認されない。出土遺物は、1の須恵器平皿で、復元胴径13.4cm、復元高9.2cmを測る。その他、土師器甕小片が出土した。2は石室周辺から出土した須恵器坏身で、復元口径11.4cm、高さ3cmを測る。

主体部 墓坑は残存部分で、長さ456cm、幅392cm、深さ88cmを測る。底面は標高48.9mで水平面を設け、石室壁材を支える部分を25～35cm掘り下げる。壁材の抜き跡を目安とした石室内法は、西辺296cm、東辺256cm、北辺136cm、南辺120cmを測る。床は、北東部に敷石と思われる径20cmほどの扁平礫が残るほかは乱されており、地上上の粘土や礫の状態の詳細は不明である。石室下方斜面上に堆積した小角礫が掻き出された敷石と考えられる。石室石材は、長さ130～200cm、幅80cm、厚さ50～80cmの大型礫と、長さ70～100cm、幅50～100cm、厚さ20～40cmの中大型礫で構成されており、すべて結晶片岩である。

出土遺物 石室内部は後世に大きく荒らされており、ほとんど旧状を残していない。床面上の土を洗浄したが、玉類や鉄器片、土器片、人骨は確認されなかった。3は西側壁石の抜き跡から出土した須恵器坏蓋である。4は東側壁石の抜き跡から出土した滑石製の紡錘車で、外径3.9cm、高さ1.9cm、孔径0.7～0.75cmを測る。側面に横方向の擦痕を残す。5・6は石室床面から出土した耳環である¹¹⁾。5は顕微鏡観察で、芯材に金色の薄板を巻き付けていることが分かる。小口面は腐食により破損しており、薄板の紋り縞は観察できない。蛍光X線分析で、表層からは金、銅が検出され、銀は検出されていない。薄板は金または金と銅の合金であると考えられる(この場合の銅の検出は、薄板に含まれる場合と、芯材の成分が影響している可能性の両方が考えられる)。また芯材の分析では非常に強い銅と、微弱な鉄のピークが検出されており、青銅ではないことが分かる。ヒ素は検出されない。6は顕微鏡観察で、芯材に塗膜状の金が加飾されている状況が看取される。蛍光X線分析で、表層からは金、銅、水銀が検出されており、この加飾が水銀を用いたアマルガム鍍金によって施されたものと推測される。また芯材の分析では非常に強い銅と、他に鉄及びヒ素と見られる微弱なピークが検出されている。鉄は、芯材に元々含まれる成分か、埋蔵環境下で埋土の付着などによって検出されたものかは不明である。いずれにしても芯材は青銅ではないことが分かる。



1 周溝 2 検出面 3 石室西側壁石抜き跡 4 石室東側壁石抜き跡 5・6 石室側面

第5図 出土遺物 (S=1/3・1/2・1/1)

まとめ

石室周辺、周溝から概ね7世紀前半の須恵器が出土した。古墳は石室内を掻き出された状態で、最終的には昭和40年代の造成時に大きく削平され、遺存した石室上に大型礎が再配置されたものと考えられる。今回工事で4号墳および周辺の旧地形は失われてしまったが、西側山頂付近の1～3号墳については、その保存について今後も注意が必要である。

註1 以下、耳環5・6の所見は、比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）による。分析に使用した装置と分析条件は以下のとおりである。装置：AMETEK社製エネルギー分散型微少部蛍光X線分析装置Orbis / 対陰極：ロジウム(Rh) / 検出器：シリコンドリフト検出器 / 印加電圧：50kV・電流値：535 μ A / 測定雰囲気：真空 / 測定範囲0.3mm ϕ / 測定時間120秒



写真1 石室上部 (北から)



写真2 石室上部 (南から)



写真3 石室 (北から)



写真4 石室 (南から)



写真5 周溝と石室 (南西から)



写真6 石室完備 (北から)

1550 警弥郷B遺跡第7次調査 (KYB-7)

所在地 南区弥永3丁目11番6

調査原因 共同住宅

調査期間 2016.4.2

調査面積 35.1㎡

担当者 比嘉えりか

処置 一部記録保存

位置と環境

警弥郷B遺跡は、那珂川の中流域右岸、標高約18.5mを測る。沖積微高地上に立地する。今回の調査地の北隣地では4次調査が実施されており、縄文晩期の包含層、中世初期の掘立柱建物・土坑・溝が確認されている。現況は田で、路面より90cmほど低い。工事計画では、田面を路面と同レベルまで盛土した後、共同住宅を建設する予定であったため、事前に試掘調査を実施した。その結果、耕作土直下のGL-20～25cmで地山の黄褐色シルトとなるが、住宅建築部分では遺構は確認されなかった。しかし、敷地の西側道路に沿って、幅1.35m、深さ約1mの範囲を表層改良することとなったため、耕作土掘取り作業に立ち会い、遺構の有無を確認したところ、土師器を含む溝が確認された。そのため、急ぎで記録保存のための調査を実施した。

検出遺構・出土遺物

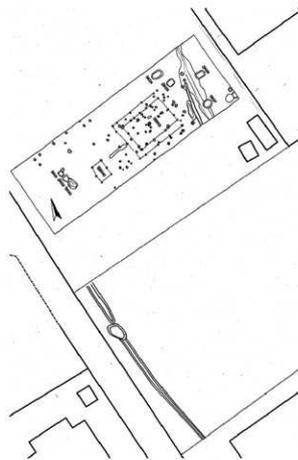
南北方向の溝を確認した。溝は一部で途切れるが、同一のものと考えられる。最大幅は1.05mを測るが、南に行くにつれて幅平より細くなる。覆土は灰褐色シルトで、須恵器・土師器・白磁・染付が出土したが、図化可能なものはなかった。

まとめ

確認された溝は、中世末から近世頃に機能したものと推定される。しかし、出土遺物には古代から中世前期の遺物が含まれるため、4次調査で確認された集落が本地にも広がっていたと推測される。



1. 調査地点の位置 (41 警弥郷 158 1:8000)



2. 遺構配置図 (1:500)

VI 平成27年度福岡市新指定文化財

平成27年度の福岡市新指定文化財は、平成28年2月16日開催の福岡市文化財保護審議会において、3件の文化財について答申を得、平成28年3月7日の福岡市公報により告示された。

1 指定文化財の概要

区分	種別	指定名称	員数	所在地	所有者
有形文化財	絵画	紙本墨画 梅に鳩・東坡風水洞図 六曲屏風	1双	福岡市博多区 祇園町	宗鏡法門萬行寺
	彫刻	木造阿弥陀如来立像	1軀		
	歴史資料	萬行寺資料	26点		

(1) 紙本墨画 梅に鳩・東坡風水洞図 六曲屏風 1双 (有形文化財／絵画)

浄土真宗萬行寺の来歴に関して、寺伝や近世の由緒書によれば、蓮如上人に帰依した山城国山科郡の住人七里車人（出家して空性）が享禄二年（1529）に九州へ下向し、博多に住居を定めて一向宗（浄土真宗）の道場を開いたことが草創という。以後、同宗派における博多最古の寺院として、萬行寺は筑前国における浄土真宗の展開に重要な役割を果たした。特に元龜天正年間、5世住持の正海（七里三河法橋と稱したという）は本山蓮如上人の檄に応じて石山本願寺に馳せ参じ、織田氏との石山合戦に参加し、さらに北陸地方の一向一揆の大將として活躍したという。

豊臣期には妙行寺と共に筑前国の浄土真宗寺院の触頭役を務めた。同時期の東西本願寺分裂に際して、筑前国の本願寺末寺は一旦東本願寺に帰属したが、慶長五年（1600）の黒田長政筑前入部の後、黒田家の指示により西本願寺へと帰参する。その際正海は特に山城国伏見へと召喚され、黒田長政から直接命を受けた。

以後、近世の福岡藩領においては、萬行寺・徳栄寺・光寿寺の三ヶ寺が西本願寺末寺の触頭役を務め、藩と本山の寺院統制に関与した。特に近世後期から近代にかけて、萬行寺からは17世曇龍・19世恒順といった二人の学僧が名を顕した。曇龍は本山の助学職を務めて教義の研究を主導したほか、萬行寺境内に学寮・龍華教校を開設して多くの修行僧を教化した。また恒順は明治初年に本山の執行職を務め、宗政にも大きく関与している。

梅に鳩図（右隻）の本紙法量は、右より①158.3×55.2②158.3×60.7③158.6×60.6④158.6×60.5⑤158.6×60.7⑥158.4×55.0（全て縦×横、単位はcm）である。それぞれの紙は縦5段に横長の紙を継ぐ。また東坡風水洞図（左隻）の本紙法量は、右より①158.6×55.2②158.6×60.5③158.7×60.5④158.6×60.2⑤158.5×60.5⑥158.5×55.3（同前）である。こちらもそれぞれの紙は縦5段に横長の紙を継ぐ。六曲一雙の屏風装束で専用の木箱に収納する。

梅に鳩図は、画面の右端に梅樹の幹を大きく、中央右から左にかけて梅花を濡えた枝を表現し、そこに五羽の鳩が止まる様子を描く。生命力の象徴としての鳩や梅花を主題とする、吉祥的な意味合いを持つ画面であると理解できる。梅樹の幹や枝の配置といった画面構成や梅樹の枝に見る直線的な形態からは、狩野永徳や海北松等の桃山時代に活躍した画家の作品と共通する様式を看取することができる。

東坡風水洞図は、画面右方に二人の童子を従えて溪流にかかった橋を渡ろうとする高士を、画面左方に梅樹に繋がれた馬と高士を迎える三人の人物を描く。三人の背後には崖から流れ落ちる滝とそれに続く池が表され、池の対岸には小庵とその中で椅子に座す若若い男性が描かれている。木に繋がれた馬が幹に体を擦り付けて梅の花を散らし、花びらが水面に落ちて流れている。画面は中国北宋時代の詩人蘇軾（蘇東坡、1036～1101）の詩「往富陽新城。李節推先行三日。留風水洞見待。」を絵画化した、所謂「東坡風水洞」と呼ばれる画面である。すなわち先行して風水洞に到着した李節推が蘇東坡の来訪を待つ場面を描く。人物の輪郭を描く線の抑揚や耳の描写、墨の濃淡で表現される松林の奥行き、その他崖や樹木、水辺の岩石等を描く水墨画の技法から、梅に鳩図と同様に狩野永徳の作品と共通する桃山時代の狩野派絵画の様式を見出すことができる。

右隻第一扇と左隻第六扇の端には「語」印（朱文重郭長方印）と「辞」印（朱文円郭扁印）が捺され、特に「語」印は天地が逆に捺されている。この印の他の使用例から、絵画の作者は十七世紀前期に活動した狩野派の絵師、狩野重信（生没年不明、宗眼と称す）であると比定される。狩野重信は狩野永徳の弟宗秀の門人で、宗秀没後は永徳の子光信に師事したとされる。「語」印・「辞」印の用例から、狩野重信の作品は「三十六歌仙図扇額」（談山神社所蔵）、「密窟図・咸陽宮図屏風」（静岡県立美術館所蔵）、「若竹芥子図屏風」（シアトル美術館）等、国内外に16件（本件を除く）の事例が知られている。狩野重信は従来、元和寛永年間に活躍したとされてきたが、作風から本図の制作は重信の活動履歴の中でも比較的早期の作であると評価される。

なお萬行寺収蔵古文書（目録番号175「目録」、目録番号176「萬行寺宝物古器物古文書目録」等）によれば、本屏風は明治二年（1869）に萬行寺檀家の博多商人中村清三が寄附したもので、当時は狩野永徳の作と伝えられていた。現在のところ、明治二年以前の伝来過程は詳らかでない。

紙本墨画 梅に鳩・東坡風水洞図は珍しい画面が描かれた本格的な狩野派の水墨画である。作者の狩野重信は狩野派が隆盛した近世初頭に狩野派本流に所属して活躍した絵師の一人であり、本図は重信の業績の中でも比較的早期の代表的な作例として位置づけることができる。本図は人物等の優れた表現力から日本近世初期絵画史における佳作であると評価される。本市に所在する初期狩野派絵画の中でも占く、また優れた作例の一つとして重要であり市文化財の指定に相応しい。

(2) 木造阿弥陀如来立像 1軀 (有形文化財／彫刻)

萬行寺の来歴は前項に譲る。本像の法量は像高82.5cm、髮髻高76.6cm、頭頂～顎14.8cm、髮髻～顎9.2cm、面幅9.0cm、面奥12.0cm、耳張11.1cm、耳長（左）8.2cm、耳長（右）8.1cm、肩幅16.7cm、肘張25.6cm、裾張19.2cm、胸奥（左）13.1cm、胸奥（右）13.1cm、腹奥14.0cm、足先奥（左）17.9cm、足先奥（右）17.6cm、足先開（外）14.6cm、足先開（内）7.4cm、足長（左）11.8cm、足長（右）11.9cmである。

構造・材質はヒノキ材による潮翫造で玉眼を嵌入する。表面は布張り錆下地に黒漆・白土・丹の具を塗り重ね、肉身部は金泥を塗り、着衣部は截金が施されている。構造は頭・体幹部を一枚材から彫成し、まず体部背面を背板状に削り短い上、体部に内削りを施し、次に箱の部分を下から鑿を入れて削り放つ。また頭・体部前後に削り短い上、頭部を内削りし、着衣の縁に沿って頭部を削り放つ。さらに左肩以下の側面材や袖材、手首先、足先等をそれぞれ削ぎ付け、木製の髹髹を貼り付ける。大衣には格子入り正鬘文や蓮華草文、覆肩衣には麻

葉繁文に蓮華丸文、裾には格子入り雷文繁といった各種文様を畵金で表す。

像容は来迎印を結び、左足をやや前に踏み出して立つという、鎌倉時代に仏師快慶が制作した安阿弥様の三尺阿弥陀像に準ずる形式であるが、肩にかかる大衣を左右対称にし、大衣の端を左肩前で釣る点などの着衣形式はやや複雑化している。また頭部に別材の螺髪を貼り付ける点や、像底裏面に台座に立てたほぞを差し込むために左右二個の円孔を設けている点が特徴的である。足裏に朱で仏文を描いた痕跡が認められる。鎌倉時代以降に流行する、生身性や靈驗性を帯びさせることを意図した仏教彫刻の表現の一例であると考えられる。

元々後頭部に頭光をはめていたとみられるが、現在その連結穴を木で埋める。白毫・肉髻珠は後補であり、右手に補修痕がある。螺髪の一部が欠失している。左袖部に破損がある。手先、畵金は当初のものと考えられる。右手は第三、四指の第二関節より先および第五指の付根から先は後補である。右耳は耳葉、耳前先の螺髪が後補である。衲衣左袖垂下部(外側)は別材で、左袖口材は後補である。左内袖は衲衣の一順目が亡失かと考えられる。

像底裏面の両足の間に朱漆で「仁治三年九月十五日 法橋快成」と記される。この銘から、本像が鎌倉時代の仁治三年(1242)に仏師快成により制作されたことが明らかとなる。快成の制作に係る仏像は兵庫東中山寺の十一面観音像(寛元二年銘・1244)、奈良国立博物館の愛染明王像(建長八年銘・1256)、奈良県春覚寺の地藏菩薩像(同前)の事例が知られる。快成はその名から快慶の系統を引く慶應の仏師であるとする見解がある一方で、十三世紀前半から後半にかけて奈良を中心として活躍した仏師集団善派の影響下にある可能性も指摘されている。上記の銘文に見える快成が全て同一の仏師であるか否かについては、研究者間でも見解の分かれているところであるが、近年の研究では各像の作風の近似性から一連の作例が「快成」名に代表される同一工房の手による彫刻である可能性も想定されている。春覚寺像の台座上裏框墨書には「大仏師刑部法橋快成 生年三十」とあり、これらの銘に見える快成が全て同一の人物であるとすれば本像は快成十六歳の作となる。なお本像は昭和五十年代に檀家より萬行寺へ寄附されたもので、それ以前の伝来は不詳である。

本造阿弥陀如来像は鎌倉時代に制作された仏教彫刻として造形、技法に優れている。かつ銘記により制作年代と仏師の名称が正確に跡づけられる点も重要である。十三世紀の在銘阿弥陀如来像として、さらに畵内で活動した仏師快成の作例として、同時代に制作された他の阿弥陀如来像と比較する際の基準的作例と見なすことができる貴重な仏像であり、本市の文化財に指定して保護を図る必要がある。

3) 萬行寺資料 26点(有形文化財/歴史資料)

萬行寺の来歴は前々項に譲る。萬行寺資料は普賢山萬行寺に伝来する歴史資料である。その総数は畵圖1幅、書跡4幅、戦国期から近世にかけての古文書21点の都合26点を数える。

この内畵圖は四八条の光明を音にして蓮台上に立つ阿弥陀如来像、いわゆる方便法身像である。像身には金泥が塗られ、畵金の技法が施されている。十六世紀まで遡る方便法身像は萬行寺収蔵資料の中でも他に例がなく重要である。裏書は失われているものの、由緒書等に見える天文年間(本山證如上人から萬行寺に対して下付された画像の可能性)がある。

書跡4幅は全て料紙に竹紙が用いられ、その筆跡から2幅は蓮如上人、別の2幅は実如上人の自筆名号であると比定される。それぞれの伝来の経緯は必ずしも明らかでないものの、中世の本願寺門主の手による名号が複数

伝来していることは、歴史ある浄土真宗寺院に相応しく貴重である。

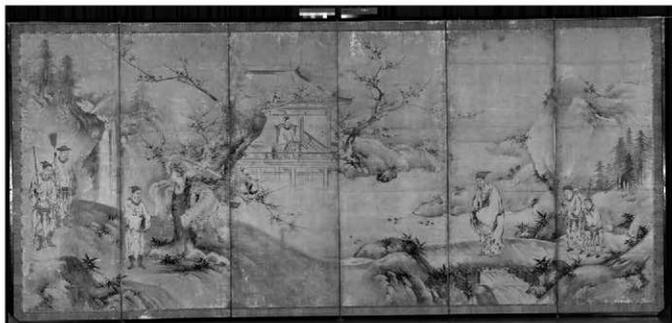
古文書21点の中で天正四年(1576)に比定される六月十二日付足利義昭御内書等の3点は、それぞれ5世住持正海の別名とされる七里三河法橋頼周と十六世紀末の一向一揆との関係を示す史料として重要である。慶長八年(1603)以降の発給に比定される七月二十一日付黒田長政書状等の3点は、十七世紀初頭に領主黒田氏の指令で筑前国内の本願寺末寺が西本願寺に帰参した事件に直接関係する史料である。近世後期の発給である年未詳中秋四日付大瀧書状等3点は萬行寺17世住持を勤めた学僧曇龍に関する史料であり、その中には文化年間に発生した浄土真宗本願寺派内部の教義論争、いわゆる「三業惑乱」の際に活躍した安芸勝門寺住職大瀧(1759~1804)の発給に係るものも含まれる。これらの古文書は全て掛幅や巻子に表装されており、近世以降の伝来過程において寺内でも特に重要な宝物として取り扱われたことが推測される。

その他、文政三年(1820)三月十五日作成の「続風土記拾遺御用二付萬行寺書上草稿一巻」や天保十五年(1844)作成の「〔御尋二付申上由緒書〕」等の7点は「筑前国続風土記拾遺」の編纂事業やその他近世の様々な契機に際して作成された寺院の由緒書関係資料である。必ずしも一次史料に恵まれない萬行寺の草創期から近世初期にかけての歴史を知る上で貴重である。寛政十年(1798)作成の「御触状写」等の5点は寛政年間から文久年間にかけて、福岡藩から領内の寺院に発せられた触状の内容を書き留めたもので、近世萬行寺が帯びた藩領内西本願寺派寺院の触頭としての役割に関わる史料である。

萬行寺資料は旧筑前国内に於いて最も歴史ある浄土真宗寺院に伝来した歴史資料として、本市における仏教、中でも浄土真宗の歴史的な展開に関わる基礎的な資料として位置づけられるものである。畵画や書跡、さらに戦国期から近世初期にかけての古文書からは、当該期の本市域における浄土真宗の伝播と展開の様相をうかがい知ることができる。また戦国期に北陸地方において勢力を振るった一向一揆と萬行寺住持七里氏との関連を示唆する資料が残されている点も重要である。さらに個別資料の内容からは、萬行寺と寺院が所在する博多住民との関係を跡付けることも可能であり、戦国期から近世にかけての都市博多の発展を考察する上でも重要な価値を持つ。



紙本墨画 梅に鳩・東城風水洞図 六曲屏風 右隻(梅に鳩図)



紙本墨画 梅に鳩・東坡風水洞図 六曲屏風 左隻 (東坡風水洞図)



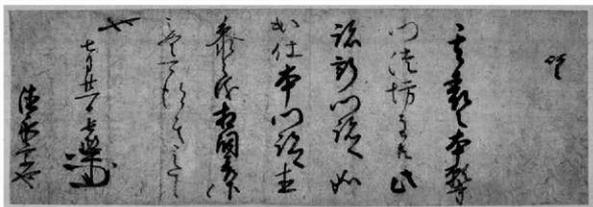
木造阿彌陀如來立像 (像高 82.5cm)



萬行寺資料 6 (天正二年) 三月十五日 顯如書状



萬行寺資料 7 (天正四年) 六月十二日 足利義昭御内書



萬行寺資料 8 (年未詳) 七月二十一日 黒田長政書状



萬行寺資料 11 (年未詳) 八月十二日 徳永宗也書状

報告書抄録

上 書 題 名	よこつかしまいぞうぶんかいねんぽう 福岡市埋蔵文化財年報
巻 次	平成27(2015)年度版
シ リ ー ズ 番 号	30
編 者 名	佐藤 一郎
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所 在 地	福岡市中央区天神1丁目8-1
発 行 年 月 日	平成28年12月25日

ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふ り が な 所 在 地	コード		北 緯 ° . ' . "	東 経 ° . ' . "	調 査 期 間	調 査 面 積 (㎡)	調 査 原 因
		市 町 村	道 路 番 号					
いそぎだらいせき 井相田入遺跡 (第2次)	ほかたらいせき庄 博多区井相田三丁目4番7号	40132	52	33-33-8	130-28-8	2015.6.10～ 2015.6.19	40.0	記録保存
なかいせき 那珂道跡群 (第157次)	ほかたなかい 博多区那珂一丁目525番	40132	85	33-34-18	130-26-9	2015.7.1～ 2015.7.5	24.7	記録保存
あらいせき 有田道跡群 (第260次)	さわらこたべ 早良区小田部二丁目56番の一部	40137	309	33-33-59	130-20-14	2015.8.5～ 2015.8.7	86.8	記録保存
ちゅうげいせき 立花寺遺跡 (第9次)	ほかたちゅうげい 博多区金の隈一丁目1028-2他3番	40132	38	33-33-50	130-28-7	2015.8.24～ 2015.8.27	176.0	記録保存
ちゅうげいせき 立花寺遺跡 (第10次)	ほかたちゅうげい 博多区金の隈一丁目1020番	40132	38	33-33-53	130-28-9	2015.9.14～ 2015.9.25	33.0	記録保存
あらいせき 有田道跡群 (第261次)	さわらこたべ 早良区有田一丁目28-1	40137	309	33-33-52	130-20-6	2015.10.13～ 2015.10.23	141.0	記録保存
なかいせき 那珂道跡群 (第159次)	ほかたなかいせき 博多区東光寺一丁目146番5	40132	85	33-34-33	130-26-2	2015.12.9～ 2015.12.14	115.0	記録保存
すいりょうせいせき 榑御殿遺跡 (第20次)	ほかたすいりょうせいせき 博多区榑南二丁目2番5	40132	54	33-32-22	130-27-46	2015.12.16	12.0	記録保存
なかいせき 那珂道跡群 (第159次)	ほかたなかいせき 博多区竹下五丁目110他2番	40132	85	33-34-9	130-24-1	2016.2.17～ 2016.2.18	16.0	記録保存
あらいせき 上戸原古墳群 (第1次)	ほかたあらいせき 博多区川原六丁目488番2他3番	40132	2854	33-34-24	130-28-21	2016.3.14～ 2016.3.29	400.0	記録保存
いせりょうせいせき 警弥郷B遺跡 (第7次)	あなみいせりょうせいせき 南区弥生三丁目11番6	40134	158	33-31-29	130-25-55	2016.4.2	35.1	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井相田入遺跡 (第2次)	集落跡	弥生/古墳	方形竪穴建物+井戸	弥生土器+土師器+須恵器	
那珂道跡群 (第157次)	集落跡	弥生	柱穴+土坑	弥生土器+鉄器	
有田道跡群 (第260次)	集落跡	古代	竪立柱建物+土坑	土師器+須恵器	
立花寺遺跡 (第9次)	集落跡	弥生～中世	柱穴+溝+土坑	弥生土器+土師器+須恵器	
立花寺遺跡 (第10次)	集落跡	弥生	柱穴	弥生土器	
有田道跡群 (第261次)	集落跡	中世	柱穴+土坑	土師器+陶磁器+石製品	
那珂道跡群 (第159次)	集落跡	弥生/古墳	柱穴+方形竪穴建物	弥生土器+土師器	
榑御殿遺跡 (第20次)	集落跡	古代	方形竪穴建物	土師器+須恵器	
那珂道跡群 (第159次)	集落跡	弥生/中世	柱穴+溝+井戸	弥生土器+土師器+瓦	
上戸原古墳群 (第1次)	古墳	古墳	古墳	須恵器+金属製品+石製品	
警弥郷B遺跡 (第7次)	集落跡	中世	溝	土師器+須恵器+陶磁器	

福岡市埋蔵文化財年報

Vol.30

— 平成27(2015)年度版 —

発 行 日 平成28年12月25日
編 集・発 行 福岡市教育委員会
〒810-8620 福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 株式会社NK企画
〒810-0011 福岡市中央区高砂1丁目6-19

THE ANNUAL REPORT
OF
THE BURIED CULTURAL RELICS OF FUKUOKA CITY
VOLUME 30



THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY

DECEMBER 2016

JAPAN